LENDY CROWZ　第一部

秋山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＥＮＤＹ　ＣＲＯＷＺ　第一部

【Ｎコード】
Ｎ６４７９Ｂ

【作者名】
秋山

【あらすじ】
さえない少年、レンディの元に届いた一通のメール。相手はわからない。怖いもの見たさでメールの相手との接触を試みた結果、とんでもない苦難に遭遇することになる。運命を変える試練に立ち望むひとりの少年の物語。（全四部作予定）

第零話ー中夜のエスケープー（前書き）

この物語はフィクションです。登場する地名、団体名などは実際のものとは一切関係ありません。

第零話－中夜のエスケープ－

自信も無いのに、プレッシャーばかりが頭の中を掠める。　どうしろというのか。　私には所詮、何も出来るわけが無いだろう。

ある男との面会を交わしてから、私は旅立つこととなった。　目的は、消して軽いものではない。

”引き返すことは出来ない。　覚悟をしろ”　と、彼には言われている。

私は最初で最後の、いや、もしかしたら史上初の行動を起こした人間になるかもしれない。

そんなプレッシャーを背負って、私たちは旅立った。

最初に行き着いたところは、ロンドンだった。　懐かしい空気が……漂っている。

＊＊＊

ビルの明かりも消え始め、大都会の息吹は次第に静かになってゆく。

午前二時を回った駅前商店街。　誰もいなくなった繁華街を急ぐ足音が聞こえる。

それは一人分。

道路はたに続く、店の明かりも消え、不気味な風鳴りの音と、草木のゆれ動く気配だけが、この街を支配する。

そして、月の明かりすらない闇に光るのはただひとつ。

足音に続く、懐中電灯のせんこう……。

それが何かを追いかけている。　懐中電灯のほそい光がぐるぐると回り、まるでサーチライトのように、犯人を探す。

商店街を過ぎたところで足音は止んだ。　ここは駐車場だ。

「逃げたって居場所はわかってるんだぞ！」

懐中電灯を持っているのは警官の男である。　男は宙に向かってそう叫ぶと、懐中電灯を駐車されている自動車に向け、次々と中を模索し始めた。

男の表情はまるで鬼気迫るかのようでもあるが、何かにおびえているようでもある。

男の息づかいは次第に粗くなってゆく。　暗闇の中を一人で歩いていくことに不安を覚え始めたのだ。　しかし、男は突き進む。ターゲットを捕まえるために。

駐車場のちょうど真中まできたところで、不意に銃声が鳴り響いた。

それを聞くなり、男は後ろを振り返る。

奴は車内からこちらを狙っているのかもしれない。　が、背後には誰もいなかった。　整然と車が並べられているだけだ。

しかし、もう一度向き直ると、そこには白い顔の、自らの背丈をはるかに越す何かが待ちかまえていた……！

男はあわてて、銃をかまえようとしたが、銃口が白い顔に向く前

に、頭を黒い何かでおおい被された。　きっと奴の手だ！

圧迫するような頭痛と息苦しさで男は混乱した。　指先が、音を立てて顔面に食い込み、頭がい骨が悲鳴をあげる。　少しずつではあるが、確実に宙吊りにされている！

足元の感覚がなくなってきたのが、その証拠だ。

しかし、もう両足とも地面につかなくなったかと思ったところで、急に右に投げ飛ばされた。

男は一番近くにあった赤い車のボンネットとドアの間に叩きつけられ、それと共に嫌な音が響いた。

あまりもの激痛に言葉が出ない。　きっと、さっきの衝撃であばらが2本は折れただろう。

そして、男はもうろうとした意識の中で見た。

白い顔は、自らの持ち物であろう、黒いアタッシュケースの中から一本の杖を取り出し、男に向け、何かを唱え始めた……。

男には彼が何をしゃべっているのか、理解できなかった。

この世の言葉ではないだろう。

イかれているのか？　それともただの幻想か？

……いや、ヤツはイかれてなどいないし、言葉も幻想なんかじゃない。

次の瞬間、白い顔は杖の先から男の視界を真っ白にさせた。　強い光で目はくらみ、男は気を失った。

男が起き上がるころ、白い顔は消えていた。

それまでの記憶は無いものとされたのであろう。

男は何一つ覚えていなかった。

第一話－５３０からの救出－

”５３０”という魔の数字が書かれた袋は、僕の母の手にかかればどんなものだろうと飲み込む怪物に変身するのだ。

「ここに山ほどある本を、どう片付けようかねえ？」

そう言ったのは僕の母で、毎度のごとく、嫌と言うほど、”捨て魔”の性格を見せ付けてくる。

イングランドのとある小さな田舎町の穏やかな昼下がりを台無しにするにはもってこいの、かしましい声とともに……。

「ちょっとまって！」

僕の意見なんか聞く耳を持た無いかのように、母は、容赦なくなんでもかんでも片付けてしまう。だから、僕が大切にしてきた”本”でさえ、脇に抱えたでっかいポリ袋のなかにつめこもうとするのだ。

まったく、不愉快極まりない！　だが、今回ばかりは、自分達にも責任がある。

どこから手をつけてよいのかわからない沢山の本と……それに混じるガラクタども。

僕の部屋は、弟と一緒に使っているから置かれている物の数は半

端じゃなく多い。
本は、ほとんどが僕のものだが、ガラクタは大概の場合弟の所有物だ。
本は本棚に納まりきってないし、ガラクタは部屋から足の踏み場を無くしている。

僕は、ちらかっているガラクタを足で避けながら、しぶしぶ本棚の整理に取り掛かった。
本棚は全部で五つある。その中の三つは、僕の日記が占領している。

この文を読んでいる君はこんなことを疑問に思ったはずだ。
「どうしてこんなに日記が多いのか」って。

理由はただひとつに決まっているじゃないか。　そう、日記を書くのが大好きだからさ！
今でも日記をやめていない。　一ヶ月で二冊は使うかなぁ……。
それも、かれこれ5年位前から続けているものだから、ざっと百冊以上はある。

「そうだ」

僕はひらめいた。　この日記、話の一番わかってくれそうな人のところへ持っていこう。
そして、一緒に読もう。　そうすれば、この日記をとっておいてくれるに決まっている。　大事な思い出なんだもの。　まずは日付の古い順に……本棚一架分！
……とはいっても、抱えきれないほどの日記がある。　が、まだ良い方かもしれない。本棚は横一列文しかなくて、幅は一メートル

くらいだ。

よいこらしょっと、日記を持ち出す僕を見て、母は、「何をしようとするのか」とでも言いたそうに、弟のガラクタを拾いながらチラチラと横目で覗いてきた。

実は母さんは、僕が学校に行っている間は、パートで働かなきゃいけないし、夜間は内職をしているほど忙しい人なんだ。すべては父さんが作った借金を返すために。

父さんは研究者だが、なかなか成果をあげられないでいる。でも、僕はそんな父を応援している。なぜなら……

「ちょっと下に行ってくる」

僕は母にそういいつけて、日記を足元にばらばら落としたりしながらも、なんとか部屋から日記を持ちだした。部屋のドアからでたところに、白い手すりのついた右へ続く廊下がある。そこを左に突き当たったところにリビングへとつづく階段が降りている。

リビングには、一番話のわかってくれそうな、ある人がいるんだ。

その人に、僕が起こした奇跡の恥さらしをしようと、胸をワクワクさせながら僕は階段を降りていった。

第二話 ― 廃墟的な学校 ―

さあ、これから日記を読むぞ！
ウフフ、信じてもらえないかもしれないが、この日記には、未来のことが書いてある。
しかし、それらは絶対に起こりえない。　だって、もう済んだことだもの。
あれ？　未来のことが書いてあるはずなのになのに、もうすんだって、おかしいことかな……

――そんなことを考えながら、僕は日記の一ページ目を開いた。

＊＊＊

「ねえねえ、ここの学校知ってる？」

「ああ、知ってる。　廃校になったんでしょ？」

「それが、まだやってるらしいのよ！」

すると、まるでそのことをアピールするように、不気味な鐘の音ともいえないチャイムが鳴った。
僕の通っている学校のチャイムは、きっとどこの学校のどんなに古臭い鐘が慣らす音より不気味だろう。

低く地面を這うように、何十もの重々しい鐘の音が重なり、やがて巨人のうめき声のように響きを変えて、去ってゆく……なんとも言い難い鐘の音だ。

何も、この学校は百年以上の古い歴史を持っているらしく、来年改築されるらしい。

巨人のうめき声のようなこの鐘の音も、典型的な電子音のチャイムに変わるのだそう。

毎日、子守唄代わりに聞いてきた”音（それ）”とわかれるのは少しさびしい。

が、大昔のゴシック建築を意識してデザインされているかのような……そう、夜はまるで、”闇の悪魔城”のような学校が新しく現代的なデザインに変わるのかと思うと、もっとさびしくなる。

だって、そうだと思わないか？　こんな、学校、めったに無いって。なかなかイかしてるじゃないか。それなのに……

今日も、あと何回聞けるのかわからない、その音を聞きながら、僕は授業の終わりに目を覚ました。　実は、さっきの会話で話題になっていたのが、僕の通っている学校なのだ。

「今、何時……？」

あたりは授業が終わったことをいいことに、喋り声や物音でにぎわっている。

先ほど闇の悪魔城のような……とは言ったが、どこの教室だって昼間は明るいし、やわらかな日差しが教室中に行き渡っている。

それはまさしく退廃的でありながらもやすらぎの感じられる空間だ。

だからというのもなんだが、僕はいつも昼寝してしまう。

僕は、頬をさすって寝跡がついていないか確認した後、いかにも

「寝起きです」といったようなかすれ声で、前の席に座っているジェシーに時間を問い掛けた。
するとジェシーは頭の上できつく二つに結ばれた金髪を揺らし、くるりと振り向いて賢そうな口調できっちりと時間を答えてくれた。
「二時四十分よ。あら、レンディ。また居眠りしていたの？」
「おかげさまで」
授業が始まる前からきちんと予習したノートを用意していたような彼女とは違って、僕は何一つノートを取っていない。
そんな彼女を相手に出た言葉はこんなものか。
さて、そろそろ僕の自己紹介をしよう。
僕の名前はレンディ・クローズ。クローズの”クロー”は”からす”という意味らしくて、どうも僕は気に入らない。汚らしい黒髪がまさにそのカラスっぽくて。
でも何故かカラスには嫌われている。理不尽だ。
それに僕は彼女と違って身だしなみが整っていないのが特徴らしい。
彼女にいつも指摘されるんだ。前髪が長すぎるとか、そのくるくるパーマをなんとかしろとか……。
でも、直したってすぐ元に戻る天然パーマだから、どうあがこうと無駄な抵抗だった。
ジェシーは「カラスを百度洗ってもサギにはならないってこのことね」と、言っていた。
なんのことだろうと思い、あとで調べてみたら”生まれ持ったものを変えようとしても無駄だ”という意味らしい。ガッカリだ。

それに、黒髪に茶色のひとみで日本人っぽいとかよく言われるけど、本当はイングランド出身だ。

僕の学校の制服は、白いワイシャツに黒くて膝丈の釣りズボン。女子は黒いプリーツスカートで、男女ともエンジ色のリボンタイをつけることになっている。

とても、シンプルで古臭いデザインだけど、僕が通える学校といったら、この学校しかなかったから、仕方が無い。

僕は、必ずといって良いほど視界に入ってくる長い前髪を振り払いながら、鉛筆を握りとってせかせかと黒板の字を写し始めた。

いつ、黒板の字が消されてしまうのも、時間の問題だからだ。授業の終わりはいつもこんな感じ。普通教科なんて、飽き飽きしちゃって……。

特に数学なんかは格好の居眠り授業さ。

でも、数学の先生は黒板に字を書くとすぐに消してしまうから、途中で途切れている部分は、ジェシーに見せてもらっていた。

今日の午後の授業はこれでお終いだった。何ごとも無く一日が終わってしまった。朝、学校に言ったかと思いきや、もうその道を反対に歩いている。

そんな毎日の繰り返しだから、僕にとっての一週間はとても早いものだった。

毎日ニへん、僕は、学校の一階大廊下にある不思議な木の彫像に挨拶をしている。今日も、帰る間際、その不思議な木に挨拶をした。

別に話かけるワケじゃないけど、なんとなくいつも目にとまるから。ただ、それだけ。

その不思議な木にはいたるところに象徴的な細工が施されている。
でも、詳しいことは全然わからない。それについて知っている人がほとんどいないから仕方が無い。
なんてったって、僕の通っている学校は宗教に関連しているワケではないから。
ここからは僕の推理だけど、おそらく昔、この学校は何かの教会として使われていて、そのなごりを受けて、あの不思議な木の彫像がおかれているんだと思う。

＊＊＊

今日は週末。どんよりとした空……でも、雨は降らないらしい。
今日は最高の図書館日和だ。
図書館日和なんて誰が決めたと思う？　僕さ。
晴れていると家にいるより外に出たくなるし、雨の日は出かける気がしない。
その中間を取って”曇りの日”を図書館日和としているのさ。

図書館に行くだけだったら、外の空気を据えるし、一日のほとんどを室内で過ごせるだろう？
これこそ、曇りの日の最適な使い方というヤツじゃないか。

僕は、今日返すはずの本である、

・天文科学と神秘　リトル・アーリー著　ジャック・リブソン訳
と、
・宇宙自然科学　ライラット・バリエント著
と、
・魔法戦士キリマン・ジェーロの冒険第七巻〜運命の歯車〜　作

クレイシー・ミザリー　絵　フィオナ・キャロル
と、
・ギリシャ神話と年中星座観測　エバリー・スミス著

を、お気に入りの黒いリュックに詰めて、去年小遣いを溜めてやっとの思いで買ったマウンテンバイクをこぎながら図書館へ向かった。

流石に、四冊も難しそうな本が詰まっているものだからリュックがずっしりとしていて重心を取りづらい。

だが、いつものことだから、僕はうまく重心を崩さないように肩をぎゅっと上にすぼめながら自転車をこいだ。十五分ほど地元のメインストリートを抜けていったところで、目的の図書館についた。

第三話ー謎のメールー

その図書館には、”メリンボラス中央図書館”という筆記体で書かれた金色のでかいプレートが掲げられており、建物の全体は石造りのゴシック建築だ。図書館の脇にある駐輪場にマウンテンバイクを止め、駆け足で入り口へ続く階段を上ってゆく。

ガラス張りの図書館の入り口を入ったところに、向かって左側、返却用のポストとＩＤカードの認識装置が置かれている。

今までは、わざわざ受付の人に本を出しにいかなければならなかったが、新しくこんな設備ができてくれたおかげで、今までよりもスムーズに貸し借りができるようになった。

僕はさっさと、図書館から借りていた４冊の本を返却用ポストに突っ込んだ。

「その本は面白かったかね？」

不意にしゃがれたおじさんの声が後ろから聞こえる。

「ええ、もちろん」

……ノリで答えてしまった。でも大丈夫。いつものことさ。

何も気にしないまま、僕は新しく借りたいと思っていた本を探しに行った。

本は番号でジャンル分けがされており、僕がいつも住み着いているのは７９０～８１０番のところだ。

天文学や自然科学についての文書が並べられているところ。あ、それと１４１０番の古代文明。それ以外は、主にカバラだとか、歴史に登場した秘密結社、民俗学について調べている。

どうしてこんなことに興味を持っているのかって？

フフーン、確かに、はたから見れば変なやつに見えるかもしれないな。

でも、僕の場合、何故か知らないけど昔から”不思議なもの”に対して強い憧れをもっていたからだと思う。

いや？　父さんが同じような趣味を持っていたからかな。

父さんは天文学者だった。父さんが研究していたのは地球外の知的生命体について。しかしどんなに精力を注いだ論文を書いても、地球外に住んでいる知的生命体の存在を証明しても、「そんなものはインチキだ」と非難を浴びせられているばかりで研究の成果はなかなか報われずにいた。そして、ついに父さんは僕が八歳のときに、病気で他界した。

僕はそんな父さんの意志を継いだんだと思う。いつか父さんの目指していた、地球外知的生命体を発見できたら、どんなにすてきなことだろう。……そのためにも、僕は日々こうやって勉強している。

まあ、楽しいから良いのだけどさ。

その日は一日中図書館で過ごした。

お昼ご飯を食べに途中で家に帰ったあとの午後も、僕は図書館で過ごした。

だが、夢中になって調べ物にしていると、日が暮れるのがあっという間だった。

不思議なことについてばかり調べていて、まさか自分の身に……それも本当に不思議なことが起こるなんて、このときは思いもしなかっただろう。

それが起こったのは僕が夜、ベッドに入ろうとして靴紐を解いていたときだ。机の上に置かれていた携帯電話が、突然うなりだした。メールだ。こんな時間にメールなんて一体誰だろう。メールの本文はこのようなものだった。

受信メール００１

１０／１６（日）２２：３７

送信者：ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ

添付：×

件名：緊急

――――――――――――――――

シルヴァニア公園にこい。

――――――――――――――――

――ｅｎｄ――

――――――――――――――――

……ずいぶんと怖いメールだ。もしかして、間違いメールかな。メール送信者の「ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ」は、たぶん”リトル・ビニー”と読むのだろう。

リトル・ビニー……何の身に覚えも無い名前だ。思い当たるとすれば、おそらく悪友達のリップとケビンの仕業かな？

あいつらはしょっちゅう、暇さえあればいたずらをけしかけてくる。

だから、今回だってぼくのことをからかっているに違いない。

それにしても、こんな時間にシルヴァニア公園に呼び出すとは……一体何を仕掛けているのだろう？　夜遊びかな。　夜遊びだったら、さんざん母にしかられたことがあるから御免だ。

でも、このまま明日まで持ち越したらどうなるだろう……シルヴァニア公園に行かなかったことで散々たたかれるのだろうか。　そうだなあ。　やつらはいたずらっこである上に、クラスの中でも権力のある連中と係わり合いがある。　本当に叩かれるかもしれない……集団リンチされかねない。

……一層のこと、逃げるより変装しておどかしてやろうか。　そう思い当たってか、僕の胸は妙な期待で高鳴りはじめた。

そうだよ、僕のことをからかったことを理由に痛い目にあったと思わせれば、あいつらは僕のことをもうからかってこなくなるはずだ。　もう実行するしかないだろう！

僕は、そんなことを勝手に妄想しながら、ひとりで舞い上がっていた。　なんと安易な考えだろうか……。

第四話ー ハロウィーンパーティへの誘いー

さて、何に変身しようか？狼男がいいかな、それとも骸骨人間がいいかな。
おっと、馬鹿らしいことをする前に返信しておこう。

送信メール００１
１０／１６（日）２２：５１
宛先：ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ
添付：×
件名：わかった。
――――――――――――
今すぐいく。

――ｅｎｄ――
――――――――――――

ところが、しばらく経って、予想もしていない返事が返ってきた。

受信メール００１
１０／１６（日）２３：００
送信者：ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ
添付：×
件名：ちょっとまて
――――――――――――
いまじゃなくて良い。

―――end―――

いまじゃなくて良いだと？　じゃあ何かの予定なのか？

送信メール００１
　　１０／１６（日）２３：０４
宛先：ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ
添付：×
件名：じゃあいつだよ！

―――end―――

すると相手はまるで僕を見下すかのような態度を取ってきた。

受信メール００１
　　１０／１６（日）２３：０７
送信者：ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ
添付：×
件名：その態度は何だ。

目上の人に対する言葉遣いか。

―――end―――

なんてえらそうなヤツなんだ……！　僕はついカッと来たので、こんなふうに送ってやった。

送信メール００１

１０／１６（日）２３：０８

宛先：ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ

添付：×

件名：時間を教えてくれない

そっちが悪い。

－－－ｅｎｄ－－－

すると相手は反省したのか、素直に日取りを教えてきてくれた。性格がまったく読み取れない……。

受信メール００１

１０／１６（日）２３：１２

送信者：ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ

添付：×

件名：

１０月３１日でよい。

－－－ｅｎｄ－－－

……なんだ、今夜じゃなかったのか。
よかった。　僕は一安心して、その後すぐに眠りに就いた。

翌日。

「よっ、レンディ！」

僕が教室に入ると、男の子が後ろから肩を叩いて、調子よく飛び出してきた。

彼は、いたずらっ子のリップとケビンの、ケビンのほうだ。
顔は、そばかすだらけで、体がひょろひょろにやせ細っている。
僕とは違ってペタんとしている、あごの高さで切りそろえられたブロンドの髪だ。

「おはよう。　あれ……？　昨日のメールは？」と、僕。

「は？　メール？」

あれ？　おかしいな……
ケビンが怪訝な顔をするので、僕は

「え、リトル・ビニーっていうメールアドレスで僕にメール送ってこなかった？」

と、言った。

「そんなのしらねぇよ……お前、寝ぼけてたんじゃねーの？」

しかし、相変わらずケビンの態度が変わらない。

どうやらケビンは昨日のことを知らないらしい。
じゃあ昨日のメールは一体なんだったんだろう？　ますます気になる……
そうこうして、1時間目が始まった。1時間目は国語だ。
勢いよく教室のドアを開けて国語の先生が入ってきた。そして彼の合図で、いままでガヤガヤとにぎわっていた教室が一気に静まり返った。

「よーし全員そろってるか？授業をはじめるぞー」

やはり、どんな学校にでも”みんなの黙らせるオーラを持った先生”はいるものだ。
しかし、意外な人物が授業中に話し掛けてきた。

僕がいつものようにノートと教科書を広げていると、なんと、後ろからジェシーがひそひそ声で話し掛けてきたのだ。

「今度私の家でハロウィーンパーティするの、よかったら来てね！」

第五話ー ハロウィーンパーティの手伝いー

「へ？」

僕はマユをくねらせ、ジェシーの顔を見直した。

「貴方、知識は沢山もっていても、経験が足りなさ過ぎるわ」

彼女はまるで僕のことを見下しているかのように、鼻を高くしてそう言う。

僕は彼女が何を言いたがっているのかさっぱりわからなかった。

知識はあっても経験はない……？

そのことを何度も頭の中でめぐらせていたらあっというまに一日が過ぎてしまった。　ハロウィーンまであと十五日はある。

しかし、そうこうしていたら、ハロウィーンの前日になってしまった。

今日は日曜日だ。　僕は朝早くからジェシーのうちへたずねた。

パーティの準備をするために。

「まさか、本当に来てくれるなんて思ってもいなかったわ！」

ジェシーは両手をあごのところで合わせ、目を輝かせた。

「僕が嘘をつくとでも？」

僕は、玄関先でジェシーの家族である父や母に歓迎された。

実は三日前に、ジェシーの家の手伝いをしたいと僕がせがんだのだ。　そのときは、ジェシーは習い事（どうやら彼女は空手を習っ

ているらしい）で家にいなかったが、代わりに取り合ってくれた彼女の母親が、僕の頼みを聞いてくれた。　ジェシーには、あとで連絡しておくと言っておいてくれたし、その返答も申し分ないものであった。

パーティに出るだけでは、ずうずうしい感じがするではないか。

「今日、キミが手伝いにきてくれたことには感謝してるよ」

ジェシーの父さんがにこやかに、そう言ってくれた。

母さんも、父さんの横でうんうんと言っている。

ジェシーの母さんは、父さんの左肩に手を当て、寄り添うようにこう言った。

「じゃあ、早速準備をはじめましょうか？　パパ」

「そうだね。　ママ」

父さんは母さんの髪をなで、ひたいにキスをした。

そのとき、何故か僕の中ではやきもちとも妬みともいえない、泣きたくなるような感情がこみ上げてきた。　僕の家族だって、昔はとても幸せだったんだ。　そう、父さんが死ぬまでは。

ジェシーが僕の顔色をうかがっている。　僕は、ジェシーに何か言われまいとすぐに気を取り直して、父さんに何を手伝ってほしいか、聞いた。

すると、ジェシーの父さんは、僕にテーブルを出すのを手伝って欲しいと頼んできたので、僕は父さんの指示に従い、父さんのあとについていった。

僕等がテーブルを出している間、ジェシーとその母さんは、ジャック・オ・ランタンを作り始めていた。

台所の片隅に積まれていたビッグ・マックスやアトランティック・ジャイアンツなどといった品種のおばけかぼちゃをキッチンテーブルの上に運び、包丁とスプーンで顔を作ったり中身をくりぬいたりしている。

僕はどちらかといえばインドア派だから（もう自覚済みだ）、体力を使うテーブルの仕事よりかぼちゃをくりぬいてるほうが良いと思った。

それにしてもジェシーのうちは何故だか落ち着く。白熱灯の光でうすぐらく照らし出された居間は高級な別荘のようで、リラックスするにはもってこいだろう。

僕は、ときどき父さんに、「指を挟まないように気をつけて」などといわれながら、居間に白くてでかいテーブルを一台、運んだ。

「さ、あともう二つあるぞー」

……すべてのテーブルが運び終える頃には、ヒイヒイと息が上がっていた。

「大丈夫か？」などと父さんに指図されたりしたが、僕は「まだ大丈夫」といって、へこたれずに頑張った。テーブルの次はいす運びだ。

いすは全部で八つある。丁度、ニ番目のいすを運んでいるときに、僕はふと疑問に思ったことを父さんに投げかけた。

「子供達って、いつも何人くらい来るんですか？」

父さんは、よいこらしょっといすを二台いっぺんに持ち上げなが

ら僕に返事した。

「いつもニ～三十人くらいかな？　私の家には、近所この達だけじゃなくて、地元の子供会や教会の子も来るからね」

「にぎやかそうですね」

すると父さんはレンディに視線を落としてにこやかにこう言ってくれた。

「レンディ君も大いに楽しむと良い。　ジェシーも喜んでいるよ」

僕も笑顔で答えた。

そうこうして父さんと会話しているうちに、作業がだいぶ片付いた。

それを見計らってか、ジェシーの母さんは「今日の仕事はこれできりあげ！」と言ったので僕は家に帰ろうとした。　が、ぼくが玄関先に差し掛かったとき、ジェシーの母さんに「ついでに、お茶でもしていかない？」と引き止められたので、僕は母さんの言葉に甘えてジェシーのうちでお茶をご馳走にされることになった。

「悪いですね」

「いいのよ。　これは、手伝ってくれたお礼ね」

「す、すみません」

ジェシーのお母さんはとても良い人だ。　だが、僕は人のうちでお茶をすることなど、本当に久しぶで、ついあせって口数が減って

しまった。
ジェシーの母さんは「じゃあ今から支度してくるから、そこのテーブルで待ってて」と僕に言い、台所へ向かった。
台所では、ジェシーの父さんも母さんの手伝いをしている。

僕はジェシーの母さんに指示されたとおり、居間のテーブルのいすに腰掛けた。
するとどこからとも無く、ジェシーが現れた。　ジェシーは徐に僕に近づき、小さな声でささやく。

「ねえ、見せたいものがあるの」

「何？」

「いいから、部屋にきて！」

何のことだかよくわからず、あへ？　という顔をしている僕をひっつかんで、二回へと続く階段への廊下へ引きずり出された。
そして、薄ら寒い階段をジェシーと二人で黙々と上って行く間、僕は「ねえ、どうしたの？」と何度か質問したが、ジェシーは「ちょっとね」と答えるばかりでなかなか質問に答えてくれなかった。
と、いうのも、ジェシーの部屋かと思われるドアの前でしばらく待たされた後に彼女が真相を教えようとしていたからだった。

「今日、下校途中に偶然話し掛けてきたおじさんから貰ったんだけど……」

僕が部屋のドアの前で暇をもてあまして髪の毛を人差し指にくるくる巻きつけていたら、ジェシーが扉の向こう側から出てきた。
腕には、ブルブルと震える生まれてもまないであろう小さな三毛猫

が抱えられている。　三毛猫といっても、白・黒・灰色の毛で覆われた少し珍しい三毛猫だ。　意外なプレゼント？　を目前に、僕は息をのんだ。

「レンディは猫アレルギーじゃないわよね？」

「そうだけど」

「じゃあ飼ってくれる？　パパやママは、二人とも猫アレルギーだから。　このままいつまでも私の家に置いておくのも忍びないし、だからといって、捨てるわけにもいかないの。　だからレンディの家で飼って欲しいんだけど」

「え！　僕のお母さんもなんていうかわからないよ」

女手ひとつで僕のことを育ててきた母さんが、猫を飼うことを許してくれるだろうか。　エサ代なんかは、きっと僕がバイトして稼ぐことになるだろう。でもバイトなんてして良いのだろうか……？　僕の学校では校則でアルバイトが許されていない。

「おじさんは言葉巧みだったわ……だから、どうしても断ることが出来なかった。　エサはもう買っておいてあるし、あとで猫と一緒に届けるから！　だから、お願い……！」

あまりの突然の出来事に、僕はためらったが、ジェシーは切実そうな目で語りかけてくるので、彼女の言っていることを聞き入れざるを得なかった。

「別に、いいけど……でも本当に、飼って良いかどうかは、僕の母さん次第だからね？」

「もう電話してあるわ」

「え、嘘?!」

まさかそこまで手が込んでいるとは思いもせず、僕は仰天した。

「嘘よ」

ジェシーはクスクスと笑って、さっきとは打って変わった明るい表情になった。

「とにかく、ありがとう……！　時々レンディのうちに様子を見に行くわ」

僕に猫を飼って欲しいと言っていながらも彼女がこの三毛猫を大切にする気持ちは変わっていないらしい。　だが、少し後ろめたい気持ちもある。

「じゃあ、この猫、どうするの?」

「籠を持ってくるから、そこに入れて持ってかえって」

「わかったよ。　でもバレないかな?」

「心配なら、あとで裏庭に取りにくるといいわ。　籠に入れて待ってるから!」

そうやって会話しているうちに、ジェシーの母さんが「お茶が入ったわよ」と階段下で僕たちを呼んでいるので、ジェシーは慌てて猫を自分の部屋に連れ戻した。　僕は元気よく、「はーい、今行き

ます！」と、言って、駆け足で階段を降りていった。

第六話ー新しい仲間ー

お茶を飲み、いくらかの軽食をつまんだ後、僕はジェシーの両親に挨拶をしてジェシーに言われたとおり、裏庭へ忍び込んだ。

「こっち、こっち！」

ジェシーが裏庭に面した出窓から身を乗り出して、一所懸命な手招きをしている。
それを僕は裏庭に行く中で見つけ、すぐさまジェシーのいる出窓まで駆け寄った。
するとジェシーは足元から大きな緑と紺のチェック柄の籠を出し、気張ってぼくに手渡した。
籠は思ったよりも重く、僕も危うくバランスを崩しそうになった。

「気をつけて！　くれぐれも、私のパパやママに見つからないようにね！」

僕は一旦、籠を地面に置いてから顔を上げ、返事をした。

「わかってるよ。　じゃあ」

ジェシーは、一度貰ったクセに、またそれを他人に押し付けることを、両親が好ましく思わないと察したのだろうか。　だが、僕が貰わなければ、間違いなく、この仔は施設に連れて行かれてしまう。
笑顔とともにジェシーに手を振って、重たい籠を抱えて裏庭を出て行った。

裏庭の出口に差し掛かった瞬間、僕はもう一度振り向いた。
後ろのほうで、まだジェシーは手を振っている。　僕はにっこりと笑って、ジェシーの家をあとにした。

家に帰るまでの間、あまりに大きな箱を抱えているものだから、道行く人々に怪しい目で見られた。　特に、同世代の子からは、じろじろと見られて、ついでにささやかれているような気もした。
やっとの思いで家についた頃には、籠の重さで手の平がしびれて赤くなっていた。

「ただいま」

しびれた手をぶんぶんふりながら、僕は玄関を上がる。
すると母さんがリビングからやってきた。

「おかえり。　ちゃんとご馳走様って言ったでしょうね？」

僕は、ここで初めて”ごちそうさま”と言い逃していたことに気づいた。
きっと、緊張しすぎていたせいだ。

「あ、う、うん……」

僕はそういいながら、猫の入ったかごを背後に隠す。

「そう。　明日はどうするの？」

去年までは、おじさんの家でパーティをすることになっていた。
しかし、今年は違う。
その理由を母に言ったらきっと驚くだろう。

「ジェシーのうちでパーティをするらしいんだ。　行っても良いかな」

「別に良いけど……。　でも、レンディ？　その籠は何なの」

驚かなかった。　しかも、母は後ろに隠しておいたかごを指差した。

「明日の仮装パーティに着ていく服だよ」

僕は、嘘がばれないように、無理やり笑顔を作った。

「あらそう」

しかし、母さんは、〝どうも怪しい〟というように、しつこくかごを見回した。　だから、僕は母さんの目を盗んで、部屋に戻っていった。

後ろで母さんが、「……レンディ？　また窓が空きっぱなしになっていたわよ？　ちゃんと閉めてくれないと困るんだから！」などと、叫んでいる。　いつものことだ。　僕は、暑がりだから、よくお風呂から出たときに、ベッドの脇にある窓をあけておくクセがある。　だが、時々窓を閉め忘れて寝てしまうのだ。　空き巣や強盗なんかが入ったら大変だからと、いつも母さんに注意される。　だが、ほとんどの場合、閉めよう閉めようと思っている間に、ぐっすりと眠ってしまうのだ。

それはさておき、母さんに猫の件を気付かれまいと、僕は急いで二階へあがった。　母さんのいる前で猫が鳴き出したら困るからだ。

でも幸いなことに、今は静かに眠ってくれているらしい。
僕は、部屋の窓に鍵を閉めてから、ベッドの上で籠のふたを開けた。　まさか同封されていたエサの袋で猫がつぶれてしまっているのではあるまい……。　いや、猫は無事だった。　籠の奥底でキラリと目が光っている。　きっと僕におびえているのだろう。

不安に思うのは猫のことよりも、母さんが何時僕の部屋に入ってくるかだ。　どうやって隠せるだろう？　いや、ここはどうどうと白状するべきか……？　もしかしたら、新しい家族が増えた、と言って喜んでくれるかもしれない。

それにしても、まだ小さいから、トイレなんかはひとりでできないだろうし、かたいキャットフードも食べられないはずだ。　だが、ジェシーが添付してくれたえさはどうやらかたいタイプのキャットフードらしい。　どうしたこった。　別の献立を考えなくてはならない。
キャットフード以外で食べてくれるとしたらなにがあるだろう？　ミルク？　それと……やわらかくしたパンかな。
僕は、早速台所へ行って、牛乳とパンを取ってきた。

「さあ、ごはんだ」

僕はミルクを飲ませようと、猫をミルクの入った器の前に置いた。しかし、猫はあたりの匂いをかぐばかりでなかなかミルクを飲んでくれない。

「ほら、ここだよ！」

僕は猫の体を持って、猫の顔をミルクに近づけさせた。
すると猫は鼻をミルクでびしょびしょにしながら、小指の第一関

節くらいしかない小さな舌
を少しずつ出して中身を飲みはじめた。

僕はもう猫を下に下ろしても構わないと思い、そっと猫の体をおろし、牛乳と一緒に持ってきたパンの袋をあけた。
パンを猫が食べられるくらいの大きさに小さく手で刻み、ミルクの入った器に浸してやった。

「そういえば、お前の名前、まだ決めてなかったな。ジェシーも特に何も言ってなかったし……お前、名前がほしいか？　ほしいよな。」

夢中でミルクを舐めている猫を見ながらぼんやりと考えていた。
するとドアノブを無理やりまわそうとするや否や、激しドアを叩く音が聞こえてきた。

（やばい、母さんだ……！）

ドアの向こう側で母の怒鳴り声が聞こえる。

「レンディー?!　早くお風呂に入りなさいよー！」

そういえば、もう五時である。　いつもなら、お風呂に入っている時間だ。

「わかってるよ、今すぐいくから」

僕はドアの向こう側の母にそう合図すると、ミルクを夢中で舐めている猫を抱えあげ、籠の中へ戻した。　器やパンの袋といった証拠はすべてベッドの下に隠し、もう一度怪しまれる点が無いか確認

したあと部屋の鍵を開けた。
　すると、母は待ち構えていたかのように、僕に問い詰めてきた。

「あんた、どうして部屋に鍵なんかかけているのさ」

「別に？　なんでもないよ」

　僕が顔を伏せて横に目をそらした。
　しばらくすると、母はフンとためいきをついて僕の前から去っていった。　それからは母がまた入ってこないように部屋のドアに鍵を閉め、風呂場へ向かった。
　風呂に入っているときが一番落ち着く。　あわ立てた湯船につかっているあいだ、僕は何週間か前に送られてきた謎のメールのことについて考えた。　リトル・ビニーという名前は、リップやケビンとは関係ないこと。　リップにもメールのことを聞いたけど、ケビンと同じような反応しか返さなかった。
　そもそも、何故ハロウィンの日にシルヴァニア公園に呼び出したのだろう？
　シルヴァニア公園といえば、敷地がとても広くたはじめて散歩しに来た人なら迷ってしまうようなところだ。　深く暗い森の中に小道が張り巡らされているだけで、サイクリングロードとしては有名だが、一般の人でキャンプしにきたりするような人はめったにいないだろう。　なんと言ったって、”でる”とのウワサが後を絶たない心霊スポットなのだから……。
　それに、ただ、”シルヴァニア公園”と聞いただけでは、一体何処に待ち合わせていればいいのかわからない。
　そもそも、得体の知れない相手からのメールに載せられている僕って一体……。　そう考えてみるとなんて笑える話だろう。　得体も知らない相手に、ただ遊ばれているだけかもしれないのに、こん

なに真剣になってるなんて。
そうこう考えているうちに、自分の部屋の鍵を閉めたかどうかについて心配になってきた。
風呂から上がったとき、僕はまっさきに部屋へ向かった。

大丈夫、鍵は閉まっている。　ん？　よくよく思い出してみれば、あの時ちゃんと鍵を閉めたじゃないか。　どうしてこんなにビビッているのか。　猫のことで挙動不審になるくらいなら、一層のこと猫のことを母に白状してしまったほうが楽だ。
でも、母さんは……いや？　ここははっきりと！　……でも、やっぱり遠まわしに……ええーい！　頭の中がごっちゃこちゃになってきたぞ！　一度、落ち着きを取り戻してから考え直そう。　僕の勇気のなさには自身でもほとほとあきれる。
僕は明日のこともろくに考えず、早々に眠りに就いた。　夜風が気持ち好い……。

第七話ー ケビンの嫉妬 ー

翌日の朝になるまで、僕はぐっすり眠り込んでしまっていた。
軽く十二時間は寝ていたことになる。　起きあがると、窓の向こう側にある屋根でミャアミャアと鳴く声が聞こえた。　もしかして……！

僕が急いで窓を開けると、そこには昨日ジェシーから貰った猫がいた。　きっと、昨日僕が窓を開けっ放しにしたまま寝ていたせいで、猫が勝手に部屋から抜け出したんだ。

「レンディ、起きたのー？　また窓が開けっ放しになっていたわよ、まったくもう」

驚いた。　母さんがドアの向こう側で、急にそう言ったからだ。
まさか、猫のことがバレているんじゃ……？
……だが、その後、母さんは特に何も言ってこなかった。
きっと母さんは、僕が眠りにつき、しかも猫が出て行ったあとで窓を閉めたんだろう。　よかった……猫が部屋を抜け出す前に、母さんが窓を閉めにきていたら、母さんに猫のことがばれてしまっていたかも知れない。

＊＊＊

ハロウィンの日の今日も、いつもどおりに授業があった。　とは言っても、1コマだけだ。
それ以降は、校内でハロウィンのお祭り。　しかもお昼で解散だ。
午後からは、たくさん遊べる。　何年か前から、校長先生が生徒と先生のふれあう機会が増えるようにと、毎年行っている行事であ

る。

学校の皆は、さまざまなお化けの仮装をして、学校中を練り歩く予定を立てている。

授業が始まる前から、クラスメイト達はみんなハロウィンの話題で終日持ちきりだった。

パーティに誘うだの、誘われただのったて。　去年まではハロウィンのことなんてとくに気にも留めていなかった。　ただ、みんなの話をボーっと聞いているだけ。　僕がパーティに誘われたことなんて、これきしなかったんだ。　……でも、今年は、違う。

建て付けの悪い教室のドアをひとりの女の子がこじ開けて中へ入ってきた。　ジェシーだ。　しばらくあたりをキョロキョロと見回しているかと思いきや、何の迷い無もなく僕のところに近寄ってきた。

「今日学校が終わったら、私の家ね」

ジェシーは用件だけ伝えると、すぐに立ち去ろうとした。　しかし、僕は気になることがあったので、ジェシーを引き止めた。

「ね、お菓子でも持っていく?」

「お好きにどうぞ」

ジェシーは”もちろん持ってきてくれるのなら、光栄だわ”と言うような相槌を打ち、仲間のグループのところへ加わっていった。

そんな彼女は早速仲間の女子達から「おあつーい」などとはやし立てられていた。　しかし、彼女は「絶対そんなんじゃないって!」と頑なに否定している。　僕はそれを見て、なんだか複雑な気分に

なった。

……彼女は僕のことをどう思っているんだろう？　女の子からパーティに誘われたことなんて、前代未聞だからどう対応したら良いのかわからない。　ただ、されるがままに事を運んできたけど、本当にこれで良いのかな……

「おい、レンディ。　お前、意識あるかよ？」

うっかりぼーっとしていたら、僕の顔を誰かがグイッと覗き込んできた。　一瞬、ピントがぼけて誰だかわからなかった。　けど、声でわかった。　ケビンだ。

「……何？」

「別になんでもねぇーけどさ」

ケビンが鼻声で答える。

「なんだよ」

ケビンは僕の前から立ち去ろうとした。　しかし、すぐさま振り返って眉をひそめて僕に問い詰めてきた。

「ずっと前から気になってたんだけど、お前とジェシーって一体どんな関係？」

一番答えに困る質問だ！　でも、ケビンは真剣に何かを探るような顔をしている。

僕はなんて返事をしたら良いのかわから無くて、しばらくもじも

じしていた。　すると、ケビンが「早く答えろよ！」と急かしてくるので、ジェシーがこちらを見ていないことを確認し、僕は小さな声で答えた。

「友達だよ」

しかし、ケビンはいいやそんなハズないといったような態度で、「おいおい、冗談だろ？」と反論した。　それを聞いて、僕はだんだん躍起になってきた。

「だから、ただの友達だって！」

「じゃあどうしてこの前ジェシーの家にあがりこんでたんだよ」

……何故知っている？！

僕は、少し思考をめぐらせてみた。

――ああ！　あの時、周辺をよく確認して置けばよかったんだ！　まず朝は、人が少なかったので、いればすぐに目に付くだろうから可能性が低い。　だが、夕方帰るときには、沢山の人に見られた。　きっとあの中にケビンがいたんだろう……。

「どうせパーティでもするんだろ？　お幸せに」

ケビンは僕に皮肉っぽくそう言った後、どこかへ行ってしまった。

「パーティはするけど……違うって。　誤解だよ。　ケビンこそ何？」

ケビンを引きとめようとしたが、僕の声は彼の耳に入っていないようだった。

あれは間違いなく嫉妬だ。　……別に僕がジェシーのことをどうおもっているというわけではないのに。　もしかして、ケビンはジェシーのことを気にしていたのか？

たった一コマの授業が終わった後、皆がハロウィンのお祭りで盛り上がっている中、僕だけは何故かハロウィンのこと以外で頭の中が持ちきりだった。　ほとんどはジェシーのこと。　それと、ケビンのこと。

あんなケビンを見たものだから、ジェシーに誘われているパーティになんて行く気がしなくなってしまった。　でも、ジェシーがせっかく誘ってくれたパーティを断るだなんて、もったいない。

お昼ごろ、僕はジェシーと二人きりでパーティを抜け出して、廊下で話し合いをしていた。

「レンディったら、そんなことを気にしていたの？」

「うん……」

「そんなの気にしなければいいのよ！　最低ね。　ケビンって、はっきりしない子だわ」

するとジェシーはケビンなんて眼中に無いかのように鼻で笑った。驚いた。　ジェシーはケビンのことを気にも留めていなかったのか。

ジェシーは続けた。

「私達、ただの友達じゃない」

そうじゃなかったら一体何？　とでも言うような表情を僕に向けてきた。

本当に、友達じゃなかったら、今までなんだったんだろう。
ただの友達……そうだよ！　僕たちはただの友達同士じゃないか！　周りの目なんて気にしなくていいんだ。　普通に、友達のように振舞えば……

僕の心は彼女に言われた一言でだいぶ楽になった。　さっきまでの複雑な気分は一体なんだったんだろう？　まるで嘘のようだ！

「そうだよね……」

僕がそういい終わった途端、いつもの巨人のうめき声が響いた。

「とにかく、このパーティが終わったら、忘れないでね！」

帰りざまにジェシーはそう言って、仲間のところへ戻っていった。
暇だ。　もともと体力が無いせいもあってか、僕は酷い睡魔に襲われた。
あ。　あそこに腰掛けがある。　丁度良いや。　少しくらいなら寝ても平気さ……
そのまま僕はこくりこくりと寝入ってしまった。
遠くの方で誰かの話し声が聞こえた。　話しているというより、一方的にメッセージを伝えているようだった。　その内容はこのようなものだ。

「疑いがあれば、自ら進め
真実はいつも灯台下暗し」

目がさめた後も、その言葉はずっと頭の中に渦巻いていた。　こ

れまで、夢をちゃんと思い出せたことなんてあっただろうか？　それでも、さっき見た夢だけは何故か特別な気がして、ずっと覚えていた。

パーティが終わってから家に帰るまでの間、僕は何度も夢で聞いた言葉の意味を考えていた。

疑いとは何のことだろう？　ケビンに対する気持ちのことかな。でも、僕はジェシーのことを友達と思っているだけで、別にケビンのことを遠ざけようだなんて考えてはいない。

その前に、ケビンの気持ちだってはっきりしないじゃないか。

今朝なんて、聞くだけの事を聞いておいて僕の質問には一言も答えてくれなかった。　ケビンはきっと何か隠し事をしているんじゃないか？　ケビンのことについて、知りたい。　けど、あえて聞かないでおこう。　変にリップと接触したら誤解を招くだろうし、時間が解決してくれるかもしれないから。

そんなことを考えながら、家に着いた。

早速自分の部屋に戻ろうとしたら、ある変化に驚愕した。　不意にうしろからどぎつい声が頭に突き刺さった。

「あんた、猫を隠してたね？」

第八話ー猫を抱えてー

「ただでさえ、ろくにやってけもしないのに、そんな野良猫を連れてきてどうするつもりさ?!」

母はものすごい剣幕で僕を怒鳴りつけてきた。猫は可哀相なことに、母に首元をつかまれて宙につるし上げられている。ミャアミャアと悲しそうに鳴いていた。

フローリングに散らかっているティッシュの山と、鼻を突く異臭で、僕が学校に行っている間に何が起こったのか、なんとなく予想できた。

「違うんだよ! これは……その……」

僕が言い訳をする前に母が釘をさす。

「黙りな! とにかく、うちじゃ猫は飼えないんだよ!」

猫じゃなければいいの? ……そう言いたいのも山々だったが、僕は黙って母の話を聞いた。

「そこらじゅうに巻き散らかした糞もあんたが全部始末するのか? 病気になった時だって、あんたが病院に連れて行くんだよ」

「そんな……」

だめだ。どうしても許してくれそうに無い。最後に母は、とどめの一言を付け加えた。

「自分で面倒を見られそうに無いんなら、さっさと捨てちまいな。まったく、これから仕事に行こうとしていたら、これなんだから。今日は遅くなるから、ご飯は自分で用意してね。　あと、ちゃんと窓は閉めておくんですよ」

「はあい」

その後、僕は母さんと目もあわせずに自分の部屋に戻っていった。猫は母さんからあずかった。

最悪な気分でジェシーの家に行くことになるなんて……。　猫は”ニャアオ”と僕を慰めるように部屋の隅で鳴いた。

今日はとことんツいてない日だ。　猫のことがばれてしまうなんて。

おまけにケビンにも目をつけられている。　もうこのまま部屋に引きこもってしまいたい気分だった。

だが、せっかく誘われたパーティをドタキャンするのも悪いと思ったから、一旦事が収まったあと、僕はパーティに行くための仕度をした。　そして部屋を出る前に、きちんと窓を閉めておいた。母さんが家からいなくなるんだから、今度こそ空き巣に入られたときは、一巻の終わりだからね。

パーティでは、仮装はしなくても良いことになっていたから、ジーパンに格子模様のシャツを羽織った。　特別に持っていくものは無かったが、パーティにただ参加するだけなのはずうずうしいと思ったので、お土産にお菓子をいくつか、”お気に入りの黒いリュックサック”に詰めていくことにした。　それと、緑の青のチェック柄の籠を持って……。

メインストリートから一本道をそれた閑静な住宅街に、ジェシーの家がある。　僕の家からは、歩いて三十分くらいだ。　いつもど

おりにジェシーの家のハーブで飾られた小さな木製の門をくぐりぬけようとしたら、一番会いたくない人物と出くわしてしまった。
……そう、ケビンだ。

ケビンはジェシーの家を囲っている白いベニヤ板でできた柵に寄り掛かって、携帯電話を片手に誰かを待っている様子だった。　彼は、僕の存在に気がつくと、彼は携帯を閉じてポケットにしまい、いつもの鼻が詰まったような声で話し掛けてきた。

「お前、ジェシーのうちに何しに来てるんだよ?」

僕は思わず息を飲んで、その場に凍りついた。

「パーティだよ。　君の言ったとおりの」

僕がパーティに来ているということは、ケビンが勝手に言い当てたはずだった。
しかしケビンには、何故かそれが理解できていないらしく、まるで汚いものでも見るかのように鼻に皺を寄せて僕をにらんできた。

「……」

しばらく、気まずい雰囲気が漂う中、その重々しい空気に耐えながら僕はあたりをキョロキョロと見回した。　すると、ジェシーが玄関口のすぐ右脇にある窓からこちらの様子を伺っていることに気づいた。
僕が必死でジェシーに目で訴えると、彼女は状況を理解してくれたらしく、相槌を打ち、すぐさま玄関へ向かって走っていった。
まもなく、玄関を降りる足音が聞こえてきた。　不意にトビラが開かれ、中からジェシーが現れる。

「レンディ！　それに……ケビン？　一体、どうしたの？」

「僕は知らないよ」

「ケビン？　俺はケビンじゃねえ」

ケビンじゃない？　どこをどうみたってケビンじゃないか。　その出っ歯やそばかすだらけの顔！

しかし、ジェシーは僕の予想をくつがえすがごとく、何かを思い出したかのようにこう言った。

「そうだ、おでこを見せて」

するとケビンが、前髪をあげて、徐におでこをさらけ出した。

「ああ！　ケレックじゃない？　来てくれたのね！」

ジェシーが両手を握り合わせてそのケレックとやらを歓迎した。

「勘違いするなんて酷いぜ。　ちなみに……こいつは誰？」

どうやらケレックという男は、僕のことを知らないらしい。　いかにも「こいつは誰？」と言った視線を僕に向けた。　するとジェシーがケレックと僕の間に割って入ってきた。

「ごめん、言うのを忘れていたわ。　ケレック、この子はクラスメイトのレンディよ」

何がなんだかさっぱりわからない。　僕はうつむいてしばらく黙

っていた。
　すると、ケレックが僕の顔をもものめずらしげな面持ちで覗き込んできた。

「へぇ〜。　俺、ケレック。　ケビンの双子の兄だ。　よろしく」

　ケレックが僕に手を差し伸べてきた。

「ぼ、僕、レンディって言います。　レンディ・クローズ……よろしく」

　ケビンとは違う人だとわかると、あがり症のせいか緊張して吃音だらけだった。　僕はおどろおどろしく握り返した。

「こんなところで立ち話もなんだから、家に上がらない？」

　そうか。　さっきジェシーがおでこを出して、といったのには、ケレックのおでこには、ケビンにはないであろうほくろがあったからなんだ。　いつもは前髪でかくれているから、そのまま出てこられたら、どっちがどっちだか見分けがつかない。

「ジェシー。　その……ケレックとは、一体どんな？」

　申訳無さそうに僕が聞く。

「そういえばレンディーには、まだ言ってなかったわね。　ケレックとは習い事仲間よ。　それに……もう家についていたんなら、ドアを開けて入ってきてもよかったのに」

　ジェシーが右隣にいるケレックと僕に目線を向けながら、そう言

った。

「俺は、時間ぴったりのほうがいいんだ」

「ところで、ケビンはどうしているの？」と、僕。

「あいつは家で不貞寝してるよ。　きっと、恋の病だな。　一応誘ってみたんだけど、聞く耳をもちゃあしない」

ケレックは「本当に残念だ」とでも言いたそうにハハンと苦笑いした。

でも、ケビンがきていたとしたら、今ごろどんなことになっていただろう？　想像したくない。

ジェシーの家にはさまざまな人々が集合していた。　ざっと十人くらいはいるだろうか。

僕はパーティのセットがされたリビングに向かうまでの間、五〜六人くらいの見知らぬ人々に挨拶された。

パーティのために用意されたリビング。　それはそれは、すばらしいホームパーティそのものだった。

テーブルの上には、ジェシーの母さん特製、かぼちゃの生クリームケーキが中心に置かれ、その周りにはシャンペンやワインなどといった飲み物のボトルやグラス、チキンソテー、甘いお菓子が置かれていた。　個人のパーティだとは思えない。　ジェシーの家って意外と金持ちだったんだ……。

「親戚やパパとママの友達も来てるの。　ちょっとうるさいけど、気にしないでね」

と、ジェシーは人ごみを掻き分け、僕とケレックにパイナップル

ジュースの入ったコップを渡してくれた。　こんなこと話に聞いていない。　パーティに誘われているのは僕一人だけかと思っていたのに！

　予想以上に盛り上がりそうだ。　大いに楽しみたい。　けど、ひとつ、ジェシーに話しておくことがある。

第九話－猫を抱えて２－

「ジェシー……あとで話したいことがあるんだけど……」

「あとで聞くわ」

ジェシーはささっとそう告げて、僕達の前から立ち去った。

このとき、ジェシーはきっと僕が何を話そうとしていたのかを悟っていたに違いない。

僕とケレックの前から立ち去るとき、なんともいえない笑みを浮かべていた。

僕の言いたかったことを察しているかのように。　決して、楽しい意味ではなく。

僕たちはその後、パーティに参加していたジェシーの親戚、パパとママの友達と一緒に楽しく過ごした。

驚いたことに、ケレックのダーツの上手さ！　ケレックの放った矢は、親戚の甥や姪では到底追いつけないほど、命中率が高い。

僕も負けじとジェシーと一緒にダーツゲームに参加したが、僕の放った矢は的に当たるどころか、矢が壁に突き刺さるのが落ちだった。

これを見たケレックに「おまえ、ちゃんと弁償しろよ?!」などと、からかわれたのは、いうまでもない。　だが、矢は本物じゃなくて、偽者のおもちゃだ。

ジェシーは一度しか投げなかったが、中心からわずか三センチずれたところに命中した。

皆が皆、的を射るたびに歓声を上げて大いに盛り上がった。

こんなこと、今までに味わったことが無い！　ジェシーが先々週辺りに言っていた、「貴方には知識はあっても経験が無さ過ぎるわ」の意味はきっとコレだったのだ。

楽しかったのはダーツゲームだけじゃない！　パーティの参加者が皆かわりがわりに、ジェシーの家に訪れた子供達にお菓子を配ったのだ。　子供達は皆、魔女やかぼちゃ、フランケンシュタインや吸血鬼のような格好をして街を練り歩き、さまざまな家々を訪ねていく。

中には、漫画やアニメのキャラクターの格好をした子供もいた。いや、子供だけじゃなくて大人も楽しんでいるかな。　この国では漫画やアニメが大人気だ。

パーティも終盤に近づき、ソファに寄り掛かって和やかに会話をしていたら、突然、ポケットの中で携帯電話がうなり始めた。　何かと思いきや……メールだ。

送信者のアドレスは……？　ｌｉｔｔｌｅ－ｂｅｎｎ……リトルビニー？！

そういえば、今日は十月三十一日！待ち合わせの日だった。

僕は慌てて、メールの内容を確認した。

受信メール００１

１０／３１（月）１７：０７

送信者：ｌｉｔｔｌｅ－ｂｅｎｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ

添付：×

件名：ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ

―――――――――――――

日付が変わる前に
シルヴァニア公園の
ひだまり広場に
来い。時間厳守。

――end――

日付が変わる前ということは、どうしても今日じゃないといけないということか。　どうしてそんなに急ぐ必要があるんだろう？
それにしても、詳しい待ち合わせ場所を知らせるということは、相手が先に待っているかもしれないという証拠だ。

そのとき、”早くリトルビニーという人物の顔を見てみたい”という衝動が僕の頭の中で渦巻いてきた。

「どうしたの？」

ジェシーが僕に話し掛けてきた。

「ううん、なんでもない」

「もしかして、彼女からのメール？」

今のはケレックだ。

「違うよ。　ごめん、僕もういかなきゃ。　急な用事ができたんだ」

「猫はどうするの？」

ジェシーが小声でレンディに話し掛けた。

「やっぱり、あとでいいや」

猫のことなんて頭の中に入るスペースがなかった。　今は、とにかくリトルビニーのことが頭がいっぱいだ。

それに、急がないと！　シルヴァニア公園までここからだと一時間ちょいかかる。

家に帰る時間を考えて、できるだけ速く行ったほうがいい。

いや……もしかしたら、家に返されないというワナが……？

（もし、そうだったらどうしよう）

僕の心は既に妙な不安と期待にかられていた。

僕は、リュックに詰めてきたお土産のお菓子をジェシーに渡した後、玄関から飛び出した。

しかし、ドアの部に手をかけようとしていたところで、ジェシーに引き止められた。

「籠、忘れているわよ！」

「ごめん、ありがとう」

ジェシーはきっと僕がジェシーの家についたときから籠のことを黙っていてくれたんだ。

なんだか、逆に迷惑をかけているみたいで恥ずかしい。

僕はできるだけジェシー達と顔をあわせないようにして別れを告げた。　今更猫の話題を持ち出したって、ややこしくなるだけだろ

うし、ジェシーにはあまり迷惑をかけたくない。　僕はできるだけジェシー達との会話を避けた。

「レンディったら、どうしたのかしら？」

「さあね～」

ジェシーとケレックが僕を見送った。　その後は、二人ともパーティに戻っていった。

家の玄関を出たとき、吐いた息がかすかに白かった。

外の空気は思ったより冷たく、きりりと澄んでいて、辺りは暗くなりはじめていた。

その中、僕は急ぎ足でシルヴァニア公園へ向かった。

だが、また重い猫の入ったトランクを抱えて長い距離を歩いていくのは、流石にきつい（また人にじろじろ見られるのはいやだしね）ので、途中、自分の家によって、籠だけ置いていくことにした。

僕が自宅にもどって猫の籠を僕の部屋に置き、再びシルヴァニア公園に向かいはじめた頃は、もうじき六時になろうとしている頃だった。

最初は、早く会いたいから、とにかく急がなきゃという思考で歩いていたが、シルヴァニア公園に近づいていくごとに、だんたん、僕の足取りは重くなってきた。

もう街の景色はすっかり秋だ。　紅葉した葉も、枯れはじめている。　昼間はにぎわっていた街も少しずつ静かになり、あちらこちらで店じまいの準備が始まる。　それにのっとられて、僕も帰らないと、という気にさせられるからだ。

だがそれでも、リトルビニーという人物の勧誘に乗る必要がある

のか？

答えは、”ある”だ。

どうしても、この謎のメールの正体を突き止めたいと思う。

顔の知らない相手と知り合いに鳴るなんて、ちょっと怖いけど楽しそうだ。

もしかしたら、素敵な出会いがあるのかも！　なんて冒険心まるだしで考えてみることもできる。

悪いやつだったら、写メを取って警察に突き出してやればいい。

僕の足取りは再び勢いを取り戻した。　なんと安易な行動だろう。

第十話－仮面の男－

四つ目の信号を曲がったところで、急にあたりの景色が変わった。
かすかに草の匂いがする。
振り返ってみれば、街の明かりはだいぶ遠かった。
シルヴァニア公園を目前にした恐怖をあおるように、うめく森からの風が、僕の顔を、髪をなでつける。

僕はゴクリと唾を飲み込み、覚悟を決めてシルヴァニア公園のゲートをくぐった。
公園内に一歩足を踏み入れた途端、じめつく土を足を取られて転びそうになった。
しかし、落ち着いて地面を踏みなおすと、澄んだ木や水の匂いが、一気に僕を静寂の世界へと誘う。
帰って来れそうにないのではないかという不安に刈られそうになりながらも、僕はシルヴァニア公園の中へと突き進んだ。
鳥たちはきっと寝静まっていのるだろう。　時々、虫の鳴きがするが、それ以外は風が木の葉に埋もれて僕を見ながら小躍りする音しか聞こえない。

いつもなら、こういう森に入っていくとき、必ずといっていいほどカラスに襲われる。
何故だかわからない。　きっと僕の黒髪のせいだ。よく黒いものに反応するとか言うじゃないか。

でも夜でよかった。　夜なら何だって（カラスだって）眠っているだろうから、安心だ。

しかし、この森の中は街を歩いていたとき以上に寒い気がした。

ポロシャツ一枚を羽織っているだけではさすがに手がかじかんでくる。　寒さが、孤独感を一層引き立てた。

シルヴァニア公園内を照らす街灯は、数えるほどしかない。街灯と街灯の距離が等しくなく、道の曲がり角を弱弱しく照らしているだけで、足元がとても不安定だった。

暗く湿った公園内で、街灯以外に頼れるのは月の明かりだけだ。街灯の光が極端に少ないためか、月の明かりが木々を黒々と輝かせていた。　これで明かりが無かったら、不気味そのものだろう。いや、今の状況だって、十分に不気味かもしれない。

だって、対になってならべられている黒っぽい四人がけの木製のベンチに置き去られた帽子が物言いたげに僕の事を見ているし、それに、後ろから誰かつけてきてないか心配で……。　何度も振り返ったけど、そこには同じ景色があるだけだった。だから、もしかしたら同じ道を何度もぐるぐる回っているんじゃなかって思えてきて、ますます恐怖感にかられることになった。

でも、今更引き換えそうだなんて、考えていられない。　もうここまで来てしまったんだ。　ここで引き返したら、待っているのは母の小言だけだろう。　友達に自慢するための武勇伝はとっておきたい。

暗く湿っぽい道を標識に従ってひたすら進んで行くと、三番目の角を右に曲がったところで大きく開けた場所にでた。　ここがひだまり広場だ。　今まで緊張してこわばっていた体がふっと楽になった。　胸をなでおろす気分だ。

だが、夏休みにケビン達と夜遊びに来て以来、僕はこの広場に、

いや、この公園自体に近づいていない。　久しぶりに見た光景だ。
さび付いた遊具が、人影を装ってたたずんでいる。　広場の中心には、柱のような朱塗りの時計があって、それ以外には特に何も無い。　ただ、日が差すだけの広場のように（だからひだまり広場というのか）開けているだけだった。

待ち合わせの男は……まだいなかった。　僕は、広場の中央にそびえ立つ朱塗りの時計台のところで待つことにした。”リトルビニー”という謎の人物（と、言ってもメールアドレスにそう書いてあっただけだが）を待つ間、僕はいろいろなことを考えた。

ほんとうに彼と会えるのだろうか？此処まで来て、ただのいたずらで終わってしまうのだろうか……いや？　もしかしたら誘拐されたり殺されたりなんてことだってありえるかもしれない……

と、思いかけた瞬間である。　僕の前方三十メートルほど離れた木陰から、ぬるりと巨大な男が現れた。　彼は、てっぺんのへこんだ焦げ茶色の革でできたカウボーイハットを被り、足元まである黒いトレンチコートを着ていた。　そして何より印象深かったのは、顔面に付けている白い仮面。　左の頬の部分には、赤い下向き矢印の先が描かれている。

遠くから見ていたときではそう強烈な印象もなかったが、近くに迫ってきたとき、その男の恐ろしさを実感した。　なんといったって、自分を見下ろすように歩いてくる。　身長が二メートル近くありそうだ。　それに……手には黒いアタッシュケース。　００７のつもりか？　何が入っているかなんて、想像できない。

男は、僕の目の前まで来ると、じろりと見下ろしてきた。
僕の口からは直感的な疑問が飛び出した。

「誰だよ」

男は僕に目だけ向けた。　目は左側しか見えなかった。　右側は陰になっていて、よくわからない。　しかし、片目だけでも充分に訴えかれられるようなものを感じた。　ひどく見下したような形相で、僕のことをしばらくにらみ付けると、不意に仮面の下で口が動いた。

「まずは、お前から名乗れ」

低く、鷹をくくったような声だった。　だが、どこかで聞いたことのあるような気もした。　とても恥ずかしくて親しみのあるような……。

それはさておき、この男が本当にリトルビニーなのか？　どこをどう見たってリトルなんかじゃない！　大男じゃないか。　名乗るならビック・ビニーだ。　僕は自分の名前を名乗る前に相手を確認した。

「リトルビニーと言うメールアドレスでメールをよこした人物を待っているんだ」

しかし男は僕の話を聞かずに、同じ質問を繰返した。

「お前が誰だと言っているんだ！　わからないのか、え？　小僧」

マスクの下から覗く目が怒りを示している。

素直に答えた方が良さそうだ。　僕は渋々答えることにした。

「僕は……レンディ・クローズ」

すると男は顎をさすってしばらく考え込んだ。

男はひとりで「やはり……」などと、ぶつくさ言っている。

「おい、お前。　それが、本名か？」

男はまるで僕のことを探るように問いかけてきた。

しかし、ここで変に馴れ馴れしく「うん」とか「そうだよ」と返したら、さっきと同じように噛みつかれるに違いない。

僕は出来るだけ丁寧な言葉を使うようにして答えた。

「本名ですけど。　あなたこそ名乗ったらどうですか」

なれない言葉遣いに、思わず舌を噛みそうになる。

しかし、彼は大人らしくなれた丁寧語で僕に返してきた。

「いかにも。　私はお前も知っている通り、リトルビニーだ」

彼はそう言うと、左胸ポケットから名刺を取り出し、丁寧に僕に差し向けた。　まるでどこかの企業社長と挨拶でもしているようだ。

これが大人の世界なのか。　僕は戸惑いを覚えながら名刺を受け取った。　……書いてある内容に、思わず目を疑った。

［全米魔術師協会］登録ナンバー０１２７８９６５

二等士官　リトル・ビニー（以下、携帯アドレス）

僕は笑いをこらえつつ、真面目なふりをして名刺を見ていた。

……こんなのふざけてる。　きっとハロウィンのせいで頭がのぼせてしまったのに違いない。

「今日お前をここに呼び出したのはほかでもない。　お前がこの先

に立ちはだかる最悪な運命から救われるためだ」

男は大真面目にそう言ってのけた。

絶対イかれてる。　この男。　運命？　そんなものがこいつにわかるのか？

そもそも呼び出した理由が理解できないってば。

「へぇ……。　それで、何をしてくれるの？」

でも実は、すごくおびえていた。　僕はそれがわからないように、わざと大きい態度で彼に臨んだ。　しかし、彼は僕よりもさらに大きい態度で言葉を返してきた。

「私は何も手をださない。　ただ、この先にまっている最悪な運命から逃れられたいのなら、協力してやるだけだ」

彼はそう言って、うなずく。

「何を言っているのかわからないよ」

「では、一週間の猶予をやろう。　それで、決断を下せ。　私についてくるか、こないかをな」

僕は疑問に思った。　仮に”ついていく”といった場合、どんなことをされるのか？

まさか変な悪徳商法ではあるまい。　ほら、よくあるじゃないか。特別なところに呼び出して、浄水器かなんかを買わされるとか。

確かこれはアポイントメントセールスっていうんだよね。　だとしたらクーリングオフしなきゃいけないことになる前に、回避する必要がある。

僕は一応、リトル・ビニーに確認を取った。

「仮に、貴方に付いていくとしたら……？」

「それは、そのときになってから教える。　今のお前では何も信じてくれないだろう。　すべて計算どおりにさせてもらう」

「それって、どういう……」

この男は僕の心の中まで計算済みなのか。

「まあ、いい。　今日は遅いだろう。　こんな時間に呼び出すのはすこし気が引けたんだが……他の用事があって忙しくてな。　今日しかなかったんだ。　すまん。　一週間後、今日と同じ場所に夕方六時だ。　いいな？」

「……わかったよ」

すると男は後ろを振り向き、背中を向けて手を振り、別れを告げた。すると、気づいたときには僕の前から消え去っていた。

あまりに突然の出来事に、僕は男の姿が見えなくなったあとも、しばらく唖然としていた。

はっと我に返ったとき、この男を信用していいのか？　という疑問がポツリと頭に浮かんだ。

その後、僕は急ぎ足で家路を辿った。

第十一話　空き巣？

家につく頃には、既に午後九時を過ぎていた。　思ったよりも長居していたらしい。　緊張していると、つい時間の流れに疎くなるものだ。

僕は、誰もいない家のカギをあけて、中へはいった。　きっと猫が出迎えてくれる……。

しかし、そんな期待も裏腹に、猫はどこにも見当たらなかった。

一体、どこへいったんだろう……？　もしかして、夜のお散歩かな？　いやいや、まさか。

その後、僕はしばらく猫をさがしてみたが、猫のいる気配がしなかった。　ミルクでおびき出そうとしても、だ。　……夜の散歩説が有力になってくる。

いや。　それでも、家にはカギが掛かっていたはずだ。　リトルのところへ向かう前に、僕は家に立ち寄って、猫を家の中へいれた。その後、きちんとカギを閉めておいたはず。　外から掛かっているから、中からはあけられない。　中から開けられるのは、窓だけだ。　だが、窓だって、猫に開けられるような構造ではない。　そうさ、あんなに小さくて、非力な仔猫に、何ができるというのだろう。　カギをかいくぐるなんて、化け猫みたいじゃないか。　きっと、家のどこかにいるはずだ！

だが、数十分たっても、一向に猫は姿を見せなかった。　なんだか、寂しくなってきた。　本当に、猫はどこかへ行ってしまったのだろうか……。

不安になってきたので、僕は急いで自分の部屋へと向かった。

予想が当たっていれば……。

そうだ、やはり。　窓のカギがあいている。　おかしい。　僕はきちんと窓をしめてカギもかけたはずだ。　なのに、何故窓のカギが開いているんだろう……？　もしや、今度こそ本物の空き巣に入られたんじゃ！

僕は、盗まれているものが無いか、家をすみからすみまで捜査した。　キッチン、リビング、母さんの部屋……だが、キッチンやリビングには荒らされた後などないし、通帳などはきちんとしまってあるままだ。　母さんのクローゼットのなかにも、みっしりと服が入っている。　盗まれたものは一つも無いようだ。　……あるとすれば、あの猫ということになる。　まさか？　猫を盗んだ犯人……一体何故、猫を盗むんだろう。　猫が大好きなのかな。　そうだとしたら、ジェシーに謝らなくちゃいけないことになる。　嫌だなあ。

そんなことをしているうちに、母さんが帰ってきた。

「おかえり、母さん」

母さんは、リビングまで来て、僕にこう言った。

「そういえば静かだけど、あの猫はどうしたの？」

そういわれて、僕は焦った。　まさか、帰ってきたら窓が空きっぱなしになっていた、だなんていえない……。

「わからない。　たぶん、散歩に行っているんだ」

「あらそ。　まあいいわ。　さっさとなんとかしてくれないと困るんだから」

その後、僕は夕食を作って、それを母さんと一緒に食べた。
なんだか、今日は色々なことがあった。　ほっと一息ついた頃に、疲れがどっと出てきた。
部屋に戻った後、僕は着替えないままベットに倒れこんだ。

第十二話「哲学的な一週間」

おそらく、僕はあの後、服を着たままベットで寝てしまったんだろう。

気が付けば夜中の2時を回っていた。　それに気づいたのも、僕の傍らで携帯電話がうるさくバイブレーションしていたからだ。

僕はそれを開いてバイブレーションの原因を突き止めた。

ああ、またリトルからか。

シルヴァニア公園に来てほしいだろと？

こんな夜中に……。

ふと気が付けば、僕は既にシルヴァニア公園にいた。　辺りは人の気配が無く、僕しかいない。　暇を持て余して髪の毛を指に巻きつけていると、やがてその人物が現れた。　白い仮面。　リトル・ビニーだ。

「今日君を呼び出したのは他でもない。　この商品を買ってもらうためだ」

彼はそういうと、右手に持っていた黒いアタッシュケースの中からビニールのクッションで包装されたある物体を取り出した。　彼はそれの中身をおもむろに空け、僕に見せた。

「これはなんですか？」

思わず疑問が飛び出す。　その物体の奇妙さに。

しかし今回も、僕は丁寧な言葉を使うようにした。　噛み付かれるのが嫌だからだ。

それにしても、この物体……一体なんなんだ？　丸い筒のような形をしている。　短いパイプのようだ。　透明のプラスチックでできたボディの中には黒い砂利のようなものがつめられている。

「水道に取り付けるだけで、水道水をアルカリイオン水にできる代物だ。　損所そこ等じゃ手に入らない。　元々、千五百ポンド（日本円にすると約３０万円）なんだが、今回は特別プライスで千ポンドだ。さらに特典がつく。買うなら今しかないぞ？」

まさかとは思っていたけど、本当にセールスだったなんて……がっかりだ。

「買いません。　帰してください」

すると、男は僕にみくびられたとでも察したのか、今までの態度とは打って変わって、僕に牙をむいた。

「何だと？！　お前、これから最悪な運命が待ち構えているというのに、その態度は何だ？」

あれ？　話のつじつまが合わない。　おかしい。

「違うよ！　たとえ最悪な運命が本当に待っていようが、それをどうするかは僕が決めることだ！　その前にセールスなんてお断り！」

僕はめいっぱい首を振った。

「真実はいつも、灯台元暗しではないのか？」

どうしてこの男が、この前見た夢の内容を知っているんだ……？

「あれは貴方が話していた言葉なの？」

すると彼が反応するまもなく、あたりの景色が一気に回転し始めた。

自分が回っているというわけではないのに、景色がどんどん飛んで……目が回りそうだ……ううっ、気分が悪い。　僕とリトルビニーの二人を残して、景色は去ってゆく。

やがてあたりは何も無くなった。　壁もなければ天井も無い。床だって抜けている。　まるで宇宙空間に二人だけ置き去られたかのようだ。

僕の目の前にいる彼は、僕のことをじっと見ていた。　仮面の下から覗く視線が怖い。

しかし、怖いだけではない。　僕はそのとき、彼の顔面に左眼を切り裂いたような傷跡があることに気づいた。　仮面には目とその周りを少しだけ覗かせるくらいの穴と小さな空気穴しかあけられていなかったが、その隙間からでもわかる傷跡だった。

もしかしたら、これは彼とはじめてあったときに見間違えたものか。　もしくは、目が充血しているということから発したただの妄想か……？

と、いうことは、もしかして夢を見ているのか？　妄想の産物であるはずのものがね実際にあるということは、現実ならありえない。夢だとしたら、ここからは何でも思い通りにできるはずだ！

……その時、僕の心の中には”彼のマスクの下を見てみたい”という嫌らしい欲望が沸いて出てきた。

よし、奴のマスクを取っ払ってやろう！　僕は彼に近寄った。

「ね、そのマスク取れないの？」

「果たして取れるかな?」

挑発的な発言にも僕は動揺しない。　だって、夢だから、何でも思い通りにできるんだもん!

「取ってあげるよ」

僕はにっこりと笑いかけると、彼のマスクの縁を掴み、勢いよく取り外そうとした。しかし、どんなに力を込めてもびくともしない。

「どうして取れないんだよ!この……っ!」

だめだ。　躍起になればなるほど、仮面は石のように頑固で硬くなってゆく。　指が入る隙間すらほとんど無い

「無礼者が!」

突然、リトルビニーが怒鳴った。　すると彼は、右腕を勢い良く振って僕を投げ飛ばした。　なんて乱暴なんだ……!

僕はぶざまな音を立ててリトルビニーの右側に倒れこんだ。　地面が無いはずなのに、何故だか痛みが走る。　変なところだけリアルだ。

リトルビニーは僕のことを下目使いでにらみつけると、フンとひとつ鼻を鳴らした。

「二度と私の前に現れるなよ。　小僧」

彼はそう言ったあと、僕に背を向けて去っていった。

その瞬間、何ともいい表せない恐怖感にかられた。　この先に、もし彼が言ったとおりの最悪な運命が待ってたたらどうする……？

今更になって、話を上手く進めて彼に付いていけば最悪な運命から逃れられる気がした。　この恐怖感から開放される気がした。

地面に這いつくばっている僕からは、彼がまるで成金のように見えた。

僕は必死になって彼に泣きついた。　格好悪いだとか、そんなの気にできない。　だって……

「違うんだよ！　ただ……これは、好奇心で……」

しかし、リトルビニーは僕のことを気に求めず、ただ、ただ前に進むばかりだった。

――……待って！

いくら手を伸ばしても彼に届かない。

気が付くと、彼の姿は僕の部屋の天井に変わっていた。

今、僕がいるところが、自分の部屋だという事に気づいた。　僕はさっきまで空中に向かって手を伸ばしていたのだ。　それに、全身が妙に疲れている。

今まで夢の中でそれが夢だと気づけたことは、何度かあったけど、こんなに思い通りにならなかった夢は初めてだ。　まるで、相手もそれが夢だとわかっているみたいで、頭の中がもやもやする。

昨日の一件で、僕はかなり疲労を溜めていたらしい。　枕もとにある目覚し時計で時間を確認したら……七時半だ。　遅刻寸前！

僕は慌てて着替え、一階に降りた。

リビングでは母が既に朝食を用意していた。

「もう遅刻寸前よ。　さっさとごはん食べなさい」

「はーい」

僕はふわあと一つあくびをかいて、目をこすりながら朝食の席に就いた。

「レンディ？　そういえば私の服が何着かなくなっているんだけど、これはどういうこと？　まさか、勝手にもっていったんじゃないでしょうね？」

まさか。

昨日のハロウィンパーティには、何も着ていかなかったはずだ。だとしたら、昨日家の中を捜査していたときに、気付かなかったんだ。　母さんのクローゼットの中は、服がみっしりと詰め込まれているから、服の一着や二着がなくなってもわからない……でも、何故母さんの服が…？　やっぱり、昨日のあれは……。

「まったく。　それに値が張るモノばかりがなくなってるわ。　これはもしかして……」

そうに違いない。

「やっぱり空き巣が入ったのかな」

僕がぼそりとつぶやくと、それを聞くなり母はすっとんきょうな声を上げた。

「空き巣？！　やっぱりって、貴方、何か隠しているんじゃないで

しょうね？」

「実は……」

僕は、昨日の出来事を一部始終話した。　家に帰ってきたら、窓が開いていたこと、そして猫がいなくなっていたこと。　リトルとのかかわりについては、黙ってある。　こればかりは隠しとおそう。

母さんのクローゼットについては、気付かなかったと説明した。

僕が説明し終わると、母は、「なんで昨日のうちに言ってくれなかったの」と怒鳴って、僕をゆすりまくった。　その後、母は、警察に連絡し、空き巣を捕まえてくれるように頼んだ。

「近所の人にも目を光らせてもらわなきゃ。　さ、レンディ。　食事が済んだらさっさと行きなさい」

僕が、玄関を出た瞬間、足元からすすすっと猫が家に入り込んできたので、驚いた。　猫は、昨日の出来事がなんでもなかったかのように、悠然としている。　なんだか腹立たしかった。

すると、母が後ろからこう付け足した。

「それと、とにかく、今週いっぱいは外出禁止。　留守番よ。　いいわね？」

第十三話－父さんの日記１－

……今週一杯は外出禁止……。　そんなことを言われたって、リトルとの約束は、どうすれば良いんだ。　そうだ。　僕は昨日、一週間後にリトル・ビニーと再会する約束をした。（今日を入れてあと六日しかない）

おかげで、学校に着いてからも、リトルビニーのことが頭から離れることはなかった。　授業が全部パーになる。

いくら、ふだんから居眠りばかりしているとは言えど、これでは、流石にまずいと思った。

普段から、授業中は別の世界に旅立っている（あくまで意識が）僕だが、今日はいつもに増してぼーっとしている。

ケビンがいくら「おい、まぬけのレンディ！」等とちょっかいを出してこようと、僕はそっちのけでリトルビニーについて行くか行かないかだけを考えていた。

「どうしたの？　今日は元気が無いみたいだけど」

理科室へ行く途中で、ジェシーが話し掛けてきた。

「うん……ちょっとね」

僕はそう告げてジェシーを追い越した。彼女には話したくない。仮に話したって、彼女は真面目だから知らない人には着いていかないほうが良いって言うに決まっている。

好奇心が丸つぶれじゃないか。

しばらく進んでいくと、僕がいるところより十メートルほど前方で

ケビンが三人の友達に囲まれて「俺、ラテン語が得意なんだよね～」などと自慢げに話しているところに出くわした。
するとケビンは、まるで僕が後ろにいることを悟っていたかのように、振り替えった。
そして、僕と目が合うと、素っとん狂な声で話し掛けてきた。

「おい、レンディ。お前が英語以外に喋れる言葉ってあったっけな」

「レンディは日本人じゃなかったの？」

「じゃあ日本語喋ってみろよ」

するとケビン集団はガハハと盛大に笑い飛ばしてきた。
あいつらは僕が勉強ができないことを知っててからかってくる。本当に立ちが悪い。
だのに、気まぐれで僕に絡んできては遊びにつき合わせたり……一体何がしたいんだ。

「馬鹿！」

衝動が口をついて出た。僕は振り返らずに、早足でケビン達を追い越して理科室へ向かった。

理科の先生が教団を前に、演説している。珍しく僕が必死でノートを取っていると、突然、視界の端に丸められた紙くずが飛び込んできた。
ふと紙くずの飛んできた方向に視線を泳がせると、どうやら犯人はリップのようだった。
リップはケビンとは正反対の、ぽっちゃりとした体系に、刈り上げた短い黒髪だ。

さっき、ケビン集団に（もちろん、リップもいた）からかわれたせいで機嫌が悪かったので、つい邪険になって答えた。

「なんだよ?」

するとリップは口の動きだけで僕にメッセージを伝えてきた。

「い　い　か　ら、
　読　ん　で　み　ろ　っ　て」

最初は彼がなんと言っているのか、わからなかった。
僕には、”いいからよんでみろって”が、”いいあら　おんでみおって”としか捉えられなかったんだ。
すると、リップはそのことを察したのか、本当に小さなヒソヒソ声でメッセージに音を乗せた。

「いいから、読んでみろって！」

そっか、さっきの口の動きはそういうことだったのか！
僕は、早速、丸められた紙くずの皺を伸ばそうとした。しかし、たたまれた皺を開きかけたところで不意を打つように理科の先生に指名された。僕は慌てて、リップから渡されていた紙くずをポケットにしまいこんだ。

「レンディ君、これはあくまで雑談だが、蒸気機関車の出現を予言していたのは誰だかわかるかね?」

そんなマニアックな知識はいくらオカルトが好きな僕でもわからない。畜生、知識不足だ。

「わかりません」

すると、意外な人物が僕に代わって、答えを言い上げた。

「サン・ジェルマン伯爵じゃないですか？　先生」

理科の先生は、まるで邪魔者が入ってきたかのようにさっと振り向き、声のしたほうへ視線を向ける。　聞き覚えのある声だ。

「おおなんと。よくご存知だ、ケビン君」

しかし、理科の先生は邪魔者ではなかったかのようにあごをさすり、猫なで声でケビンを誉めた。僕は、このわざとらしい誉め方が大嫌いなんだ！

……しかし、どうしてケビンがそんなことを知っている？

クラスの皆は、ケビンが突然博識な真面目君になったかのように、彼に対して驚きと尊敬のまなざしを投げかけている。とは、言っても一部のケビン集団がほとんどだ。普通の子達は、「意外だなあ」という感じである。

しかし、ケビンが先生の質問にきちんと答えたなんて……雪でも振るんじゃないか？

なんてったって、ケビンは今まで先生に指名されたとき、一度として真面目な答えをいったことが無い。

理科の先生は続けた。

「キミ達は歴史の裏に隠された真実を、今、垣間見ることができるぞ？　ククク」

先生は口の縁を不気味にゆがめると、一度咳払いをした。

「サン・ジェルマン伯爵は、不死身の男として有名だった。　そして彼は芸術家であり、一流の科学者でもあった。彼は自らを四千年以上も生きていると言い、未来を予言したり多くの歴史的人物とも関連していた」

「そんなの嘘に決まってる」

クラスのどこかから野次が飛んだ。

「これはあくまで伝説だよ、ジェシカ君」

理科の先生はそういうと、鼻でフフンと笑った。
ジェシカというのは、ジェシーの本名だ。
そのとき、クラス中が大笑いした。　一方、ジェシーは決まり悪そうにうつむいて、先生に聞こえるか聞こえないかの音量で悪態をついている。
理科の先生はそれを無視して続けた。

「彼は今も生きているのではないかと、一部の研究者の間ではうわさされている。しかし、それが本当かどうかなんて、誰も証明したことが無い。
ただ、一ついえることは、何時の時代にも、突然、その赤い服を着た男が現れ、未来を予言していくということだ。
多くは危険の予告だがな……」

ここで巨人のうめき声が鳴り響いた。
クラスの皆は一斉に教科書を片付け、教室へと帰っていった。

しかし、僕は途中でリップに話し掛けられていたから最後までノートを取っていなかったので、ノートの続きを取っていた。

先生が理科室の寮に戻ったことをいいことに、僕はリップから渡されていた紙くずを広げた。

紙には、こう書かれていた。

”ケビンって、最近様子がヘンじゃん?”

教室に戻ったあと、紙に返事を書いた。

”もしかして、僕よりオカルトが好きになってるってこと?”

理科の次は、歴史の授業だった。歴史の授業は、いつも教室で行われている。

リップは僕の席から数えて、左に二つ進んだ席に座っているので、左隣の子に手紙を送ってもらいながら僕らはやりとりを続けた。

”よく知らないけど、ケビンの兄が関係してるらしいんだよね”

”それって、ケレックのこと?”

”何で知ってんだよ!”

と、リップが書きかけたときである。

先生がこともあろうに、リップの右隣を通りかかったとき、立ち止まった。

リップの書いている手紙が、先生の視界にはいってしまったらしい。

僕の席からでは何が起こっているのか、よくわからなかったけど、話し声だけは聞こえた。

その内容はこうだ。

「授業中にこういうものを机に出しているとどうなるかわかっているね？」

穏やかに、しかし厳しく歴史の先生はリップに指摘する。
一瞬、リップはためらった後、渋々紙くずを先生に渡した。

「これは、授業が終わるまであずかっておきますから」

先生は紙くずを顔の前で自慢げに揺らした後、ポケットの中にしまいこんだ。

リップは「ドンマイ」とでもいいたそうに、同意を求めて僕に目配せしてきた。顔が引きつっている。
僕も、ぎこちない笑顔で返した。　きっと引きつっていただろう。

放課後、リップはすかさず僕に、どうしてケレックのことを知っているのか尋ねてきた。
パーティのことを話したら、リップは驚いてケビンのいる方をチラと見た。

「あいつ、何も言ってなかったぜ？」

「え、そうなの？」

するとリップは少し考え込んで、こういった。

「……どうもおかしいんだよ。最近。ケレックが関係していることは確かなんだ。

あいつがケレックから何かしらの影響を受けたんだと思う。兄ちゃんっ子だからね」

「ケレックはオカルトが好きなの？」

「さあ。　オレはオカルトになんて興味ないから。でも、ジェシーはあの時、よく言ったと思うよ」

リップはそう言うと、ふくよかな頬を吊り上げてにやりと笑った。

第十四話－父さんの日記２－

家に帰ったあと、自分の部屋が異様に片付いているとに驚愕した。
原因はもうわかっている。
僕は急いでリビングー向かい、母に文句を言いつけた。

「ねぇ、母さん！　僕の部屋、勝手に片付けないでって言ったじゃないか！」

しかし、母はソファーに座って、りんごの皮をむきながら極めて冷静な面持ちで答えた。

「あら、レンディ帰ってたの？　あんたの部屋は片付けておきましたからね。
ああ、そうそう。　こんな物がでてきたんだけど……」

すると母は立ち上がり、テレビの上に置いてあった本を手に取った。
どうせ、またくだらないものだろ、と思いながら、僕はその本に目をやった。
……不気味な本だ。表紙は真っ黒。真中には、白で五芳星の模様が大きく描かれている。

「たぶん、あの人がつけていた日記だと思うのよね」

母はそういいながら、日記のページをパラパラとめくり始めた。

「あの人って？」

「あんたの父さんよ」

母は首を回しながら答えた。

「それ、日記なの？」

「でも、詳しい内容はさっぱり。　まったく、あの人が考えていたことなんて、常人には理解できないわ。　ラテンなの語かしら。あんたも、読んでみる？」

そういうと母はパタンと日記を閉じ、僕に差し向けた。

「え……うん」

日記は、一・五センチくらいの厚さで、結構な重みがあった。

僕は、部屋に戻った後、その日記を読んでみることにした。

……しかし、僕にもその日記の内容がわからなかった。

ローマ字だけど……見たことの無い単語ばかり。普通の英語とは違っている。

とりあえず、自分なりに訳してみよう。ラテン語だったら、学校でも少し習った。

それに、なんてったって、父さんの日記だ。

あの父さんが……

一体どんなことを日記に書いていたんだろう。とても気になる。

――翌日――

僕は、昨日の晩の遅くまで日記の翻訳に努めていた。

そして、学校に来てからも、日記の訳を行っていた。おかげで眠いの何の……。
でも、父さんの書いた日記だと思うと、眠ってなどいられなかった。早く内容を知りたい！

ときどき、先生に見つかりそうになるから、教科書の下にしいては、こそこそと翻訳。

しかし、いくらラテン語の辞典で探しても乗っていない単語ばかりが頻出してくる。
おかげさまで、授業が三コマ目になっても、一ページ目すら訳せていなかった。
まともに授業を受けたときとは違う意味で、頭が疲れる。

次の授業が移動教室のとき、皆が移動し始めているにも関わらず、一人で日記の内容とにらめっこをしていると、たまたまケビンが僕の脇を通りかかった。
不意に彼が話し掛けてきた。

「おい、レンディ。　お前何さっきからコソコソやってんだよ」

「翻訳だよ」

すると、ケビンは下を向いている僕の頭におでこをくっつけて、日記の本文を無理やり覗いてきた。

「おいお前、いつからラテン語なんて読めるようになったんだ？」

ケビンは自分が他の誰よりもラテン語が得意だと言い張っていたから、僕が急にラテン語が読めるようになったのかと思い込んだらし

く、しばらく僕のことを、信じられない、といったような目つきで見てきた。

しかし僕は、

「ねえ……その……さ、この日記、なんて書いてあるのかわかる？　僕、いまいちラテン語とやらがわかんなくて」

と、本当のことを言った。実は、学校で習っておきながらも、僕には半分も理解できていない。

すると、ケビンは、時計を見るために振り返った後、こう言った。

「なんだよ、わからないで翻訳してるのか？　とにかく、今は時間が無いから、後でな」

ケビンは急ぎ足で教室を出て行った。

昼休み、たまたま空いていたジェシーの席に座り込んで、僕に話の続きを持ちかけてきた。

「例の本、見せろよ」

僕はケビンの前に、日記を出した。すると、ケビンは日記の表紙を見るなり、両手で、日記をうばとって、くらいつくように眺めた。

「これって……」

彼は驚きを隠しきれず、口からは狂喜の声が漏れていた。

そして、中をあけると、鬼のような目で吟味し始めた。

そんなにその日記が珍しいものなのかと、不思議そうな目で僕がケビンのことを見ていると、不意に彼が僕に問い詰めてきた。

「こんな本、どこで手に入れたんだよ？」

「どこでって、僕の母さんが家で見つけたものだけど」

すると、彼は予想もしなかった言葉を口にした。

「俺にくれよ」

つい、僕は拍子抜けして、ケビンにもう一度聞き直した。
しかし、彼は同じ事を言うばかりで、本のことしか眼中に無いらしい。

「じゃあ、借りるだけでも！」

とうとうケビンは必死になって僕にねだりこんできた。
僕の気持ちは揺らいだ。昔から、強く言われると断りきれない性格ではあった。が、今回ばかりはそうやすやすと許されることではないだろう。だって、父さんの日記だ。
身内の遺品を他人にやすやすと貸し出すなんて……でも……

「訳してくれるんなら、いいよ」

「わかった、じゃあ明後日返すよ！」

「頼むね」

普通に喋ったつもりだけど、ひそかに言葉の裏には念をこめていた。
絶対に返して欲しい。
その時、何故ケビンがそこまでしてこの日記を見たがっているのか、

わからなかった。
ただ、珍しいものだからとか、興味本位でのことだと思っていた。
既に運命の歯車が回り始めていたことなんて、僕は知らないのだから。

その日の夜、僕は妙な夢を見た。
今度はリトル・ビニーではない。もっと、不可解な人物だ。　そう……

第十五話ー赤い服を着た男ー

僕は暗闇の中に立っていた。
真っ直ぐと臨む先には、天井まで続くステンドグラス。

今は夜なのか。外から差し込む月の光を受けて、ステンドグラスから発せられる色とりどりの光が、僕やその周りを照らしている。ステンドグラスには、丁度中央に、丸い、そこだけ透明ガラスの部分があり、月が丸い窓辺から覗いていた。
満月だ。普通の人なら、満月を見て、いい月夜だな、と感じるだろうが、僕はそうじゃなかった。
何か起こるのではないかと、ソワソワしてたまらない。それがどんなことなのかは、きっと、この先明らかになるだろう。

僕は、ステンドグラスから差し込む月明かりを頼りにしながら、辺りを見回してみた。　すると、前方から、カツンカツンという、静かで、ゆっくりとした足音が聞こえてきた。それが近づくにつれ、さっきから感じていたソワソワ感が増してくる。

僕より一メートルくらい離れたところで、それは止んだ。月明かりがあるとは言えども、人物の顔がはっきりとわかるほど明るくはない。
それに、足音の持ち主の背後にステンドグラスがあるせいで、人物は逆光により黒いシルエットのように見える。
目を凝らして、よくその人物を見てみると、どうやら男のようだった。
恐ろしげなまでに顔は無表情で、昔の貴族のようにリボンでこげ茶

色の髪を後ろにまとめている。
長めのコートに長ズボン。月明かりを受けて輪郭が光っていたから、確認できた。
……この男、全身真っ赤な服を着ている。

そう、赤い服を着た男だ！

僕の中では、彼の正体がのどの奥まで込みあがってきていた。しかし、あと少しというところで、誰だか思い出せない。
しばらく男の姿を眺めていると、彼は手を一振りし、背後にあるステンドグラスの絵をバラバラにした。しかし、驚くのは、その散らばり方だ！　何故か、空は空で、太陽は太陽で、動物や人々も、ちゃんと形を残したままバラバラになっている。
相当器用な割り方か。そうじゃなければ、奇跡だ。

唖然としていると、まもなく、その砕け散ったステンドグラスに変化が訪れた。　空は、隅のほうから、だんだんだんだん、黒や紫色で染まりだし、太陽は眠りにつき、動物や人々は死んでゆく。
そして、各々の部分は、一つにまとまり、それが混ざり合って、一つの塊になった。
その塊は見る見るうちに小さくちぢみ、ゆっくりと男の手の中に収まった。
男は不意に口を開いた。

「これは、今から起ころうとしている事実です」

相変わらず、恐ろしげな程に無表情だ。

「このまま放っておけば、貴方はいずれ救われないでしょう。
しかし、運命を変えるのはあなた自身です」

男はそういうと、手にしていたステンドグラスたちの塊を手でこなごなに砕いた。
その破片は空気中に散らばり、煙に姿を変えたかと思いきや、すぐに見えなくなる。
まるで空気中に溶けこんだ様に……　そして、いつのまにかステンドグラスは元通りになっていた。

この男は魔法使いか？
僕は、しばらく唖然としていると、ガタンと床が抜けたように、下に落ちた。
あっというまに、奈落の底へと落ちてゆく……

その瞬間、僕はベットから跳ね起きた。

「今のは……」

起きてから2，3秒は現実味が無くて、変な気分だった。
深呼吸をして、落ち着いてから、夢で見たことを思い出そうとした。
確か、僕は暗いところにいた。そう、教会の中かな？　確か、僕の前に赤い服の……
そうだ、サン・ジェルマン伯爵だ！

確か理科の先生はあのとき、伯爵は赤い服で現れ、危険を予言していくと言っていた。
でも、今のは夢の中での話だ……。　夢の中で起きたことも有効なのだうか？

しかし、そう考えてみるとぞっとする。　仮に、この世界で伝説上の人物だとしたら、夢の世界では本当だってことなのかもしれな

い。　いや、これじゃあ考えすぎだ。きっと、何かの強迫観念が形になって現れたのだろう。

そういえば、この前、リトルビニーに「お前には、この先に最悪な運命が待っている」とか言われていたじゃないか。　きっと、そのせいだ。

僕は、できるだけ、その日に見た夢の内容を考えないようにした。

第十六話ー魔王の日記ー

レンディが寝ている間、マグレガー家（ケビンの家）ではちょっとした騒動が起きていた。

「ケビン、お前、面白そうな本持ってるじゃん」

そういったのは、ケビンの双子の兄、ケレックだ。
ケビンが居間に入ってくると、ソファーでくつろいでいるケレックが、ケビンの持っている本に目をやった。
黒い表紙に、白い五芒星。　レンディから訳してほしいということで預かった品だ。

「俺の下僕からもらったものだけど」

ケビンは、家でレンディのことを下僕と呼んでいる。あまりに悲惨な呼び方だ。しかしケビンの家では誰も、その呼び方を指摘したりしない、変わった家族なのだ。
一家そろってレンディのことを憎んでいるワケではないが、レンディの家のようにそれほど金持ちでもない家に対しては、動物も同然の扱い方である。

「ま、これは兄さんが読んでも手に負えないと思うよ」

「なんで？」

「フフン、ラテン語なのさ。　それもぜーんぶ！」

「げっ。　俺はそういうの苦手だ」

「俺が今から訳してくるから！　ククク。内容が楽しみだぜ」

ケビンはそう言って、自らの部屋に戻った後、ラテン語に関する資料を机上に並べ、早速日記の翻訳に取り掛かった。

ええと？　まず、一日目。大部昔だな。

今から5年以上前だ。内容は……”何もしなかった。”

何もしなかっただと？！　二日目は……同じ内容だ！　何もしなかったんなら、わざわざ日記に書かなくてもいいのに！　ばっかじゃないの？

しかし、ケビンがそう考えていられるのも、最初のうちだった。日記の翻訳を進めていくうちに、信じられない記事を目にすることになる。

丁度一番のページだった。あと、数枚白紙のページが残っているが、字が書かれているのは、このページで最後だった。

”私は扉を開くことに成功した！　これからは人間の皮を脱ぎ捨て……”

……え？！

”永遠の存在になるのだ”

そのとき、ケビンの頭の中には、とても恐ろしい事が思い浮かんだ。
まさか、ずっと前にじいちゃんが言っていた伝説は本当だったのか？

ケビンのじいちゃんは、もう死んでしまったが、地元では有名な魔術師だった。
そんなじいちゃんは最期にこんなことを言っていた。
”何年か後、もしくはもう既に、人間が魔王になって、夢魔たちを操り、夢の世界を支配する”と。

これはあくまで伝説上の話だが、ネットで調べてみたところ、いつか一人の魔術師がその伝説の現実化に取り組もうとしているとのことらしい。
さらに、人間の魔王は、人工的につくったなんらかの装置で夢の世界に無理やり入り込んだというウワサだ。

そいつは普通の夢魔と違って、肉体の状態で夢の世界にいる。肉体の状態で夢の世界にいるなんて、絶対におかしい。夢は人の精神で構成されている世界だ。なのに……。
機械の故障か何かか？

（それにしても、その装置が、日記の中で”扉”と、例えられているのだとしたら、間違いない。
この日記の著者は扉を開いて魔王になった張本人だ！
でも、一体だれが……？　そもそも、何故こんなものがレンディの手に渡っていたのだ？
あんなやつが、持っていたって、何の意味も無いじゃないか。魔術師の家系でもないくせに。

おっと、言い忘れていたが、俺の家系は先祖代代から続く魔術師

の家庭なんだ。
魔術師といったって、理解不能な儀式だとか、よくわからないおまじないでヒーリングするのが仕事だが……。）

そう考えているうちに、ケビンはこの前ケレックがいじくっていた”あるもの”を思い出した。
一階に下りたとき、たまたま牛乳を飲んでいるケレックを見たので、彼に”あるもの”のことを聞いてみた。

「ブフ！」

ケレックは鼻や口から白い液体がこぼれてこないように、そこで口元を拭いてから、よくもそんなこと聞いてくれたなといわんばかりに、うなって返事をした。

「あんなものが欲しいって、正気か？」

「正気も何も、俺は見せてもらいたいだけだ」

「捨てちまったさ、あんなもの。持ってたってなんの価値も無いからな」

その瞬間、ケビンはショックのあまり言葉が出なかった。捨てちまっただと？！
お前こそ正気か？
ケビンはすぐさま、家中のゴミ箱をあさった。ケレックは「おかしい奴だな」とはき捨てて、自分の部屋に戻っていった。

”あるもの”を探した。しかし、いくら探しても……無い、無い。無いったら無い！

探している間、せわしく家の中を駆け回っていると、母や父に「何をしているの？」と言われた。

事情を説明したところ、二人とも顔を合わせて「とんでもない！」と言って、ケビンと一緒に”あるもの”を探し始めた。

母は、”あるもの”を探している間、何度も「まったく、あのこと来たら……本当に魔術を信じない子なのね。それよりも、この前逃がしてしまった使い魔がまだいれば、簡単に済むことなのに」と、ぼやいた。

俺の家は魔術師の家系だから、もちろん使い魔だっている。しかし、その使い魔が居なくなってしまったからには、自力で”あるもの”を探さなければ！

”あるもの”を探し始めてたらしばらく経ったとき、ケビンは台所の生ゴミが捨ててあるゴミ箱の底でそれを発見した。

”あるもの”は生ゴミの汁でひどく汚れ、鼻にツンとくるような悪臭を放っていた。

「うっ……あったよ、ここだ！」

ケビンがそう叫ぶと、たまたますぐそばにいた父が、「それ、まだ使えるか？」と不安そうな顔で言った。

「たぶん、この臭さがなんとかなればね」

ケビンは、鼻とあるものの端っこをつまんで、いかにもそれが臭そうなそぶりを見せた。

”あるもの”を綺麗にしたあと、俺は自分の部屋に持って帰って、内容を確認した。

”あるもの”とは、これが書かれた茶色い紙切れのことだった。内容はこうだ。

～後継者専用権利書～

後継者名　　：＿＿＿＿＿＿＿＿

保護者及び管理者：＿＿＿＿＿＿＿＿

有効期限　０Ｘ年１１月８日

《概要》

この権利書は、魔術師における後継者決定のための重要書類である。

後継者を希望するものは、英国魔術師教会に上記を記入の上提出する。

既に魔術師としての参入儀礼を行っていないものは、あらかじめ申し出る。

この書類を提出した後、英国魔術師教会の一員としての新名の儀式を実施する。希望の魔法名がある場合は……

＜以下略＞

ケレックは、もともとマグレガー家（ケビンの家）の新しい魔術師として後継する予定だった。

しかし、ケレックは端から魔法だとかそういったものを信じない主義で、魔術師になるだなんて、天と地がひっくり返ってもしない男だ。

ケレックがこの権利書を放棄した理由はもう一つ有る。
正式な場で魔術師になった場合、英国魔術師教会から特別教育を実施されることになる。
月に一回の講義に参加するだけなのだが、それを面倒くさがってケレックは魔術師になることを放棄した。

ケレックはケビンとは正反対の勉強嫌いだ。
ケビンはプライマリーの時に既には、ラテン語がベラベラだったし、魔術に関することにも詳しかった。
それが学校で評価されれば、今ごろ大学に行っててもおかしくないくらいだが、魔術に関する教育など世の中ではほとんど認められていないのがそれの難点だった。

魔術なんてモノは、信じるか信じないかでその価値観が大きく変わってきてしまう。
ケビンのように、関心があれば、努力次第で才能を開花できる。
しかし、ケレックのように最初から何もしようとしなければ、何も起こらないままなのだ。

じいちゃんが言っていたことが本当なら、夢魔がケビン達をいつ襲ってもおかしくない状況にある。
（だとしたら早く魔術師になって、その魔王が操っている夢魔をやっつけないと！
後々には、魔王に会って、話をつけよう……
でも、他の魔術師がやっつけてくれているとしたら？　そうだとしたら、俺は協力したいと思う。夢魔に襲われて家族を無くすかもしれないから。　家族は、絶対に守りたい。）

ケビンはその時、魔術師になることを決心した。

第十七話ー宣言ー

木曜日。　僕はケビンが教室に入ってくることを心待ちにしていた。

なぜなら、今日、父さんの日記を返してもらうとともに、ラテン語で書かれた内容を翻訳してもらう日だからだ。

ケビンが教室に入ってきたとき、僕は早速父さんの日記のことを聞いた。

「ね、教えてよ。なんて書いてあったのか」

「……」

僕は、いつ、ケビンが言葉を返さんとワクワクしながらケビンを見つめた。

そこへリップがやってきた。

「お、ケビンか。　おはよう！　何を話しているんだよ？」

「あ、リップ」

横から入ってきたリップに、ケビンが目を向けた。

「いや、ちょっとね。二人だけのことなんだ」と、僕。

「なんだよいちゃついちゃって。　おかしな奴だな」

リップが僕たちに愛想笑いして、リップが立ち去るのを見届けた

後、もう一度ケビンに日記のことを聞いた。
　すると、ケビンはスクールバッグの中から父さんの日記を取り出して、僕に返した後、こう言った。

「その日記は、最初のほうは何もしなかった、とかよくわからないことが書いてあったけど、
　主に瞑想だとか、儀式についてばかりがかかれていたよ。
　魔術師かなんかの日記じゃないか？」

「え……？」

まさか、僕の父さんが魔術師？　そんなワケない。　だって、父さんは……

「まって、僕の父さんは天文学者だったんだよ？」

「お前の父さんなんか、知ったこっちゃねぇよ。
　とにかく、そういうことについてが書かれていたんだ。　文句あるか？」

そう言って、ケビンがリップたちのところへ行きかけたときだ。
何かを思い出したのか、彼は突然、僕のほうへ向き直った。

「それと……。　そうだな。　すごく言いづらいんだけど……」

「何？」

「もしかしたら、大量殺人が起こるかもしれない」

そういったあと、ケビンはいつものようにリップたちのところへ混

ざっていった。
大量殺人が起こり始めるかもしれない?!
どうして、そんな意味深なことを……
僕はケビンに聞きたいことが山ほどあった。　でも、これはケビンが友達と話しているところで聞くことではないだろう。　聞くのはあとにしたほうがよさそうだ。

その後、僕はいまかいまかとケビンを隙を狙った。
ケビンが一人になるたびに、ケビンのほうへ目が行く。　大量殺人だとかいう、よくわからないけどすごく恐ろしいことが気になって仕方が無い。

そして、お昼休み。
やっとのことで、僕はケビンを捕まえられた。

「あのさ。　朝ケビンが言ってたことなんだけど」

「何だ?」

「大量殺人が起こるってどういうこと?」

ケビンは急に冷や汗を掻いて、黙り込んでしまった。
めずらしく、ケビンが僕に向かって気まずそうな顔をしている。
ケビンは目を一瞬、横にそらしてから、緊張した面持ちでこう答えた。

「あのさ……お前、夢魔って信じるか?」

僕は唐突な質問に唖然とした。
ケビンが、そんなオカルト的なことを聞いてくるなんて、珍しい。

「夢魔？　それって、インキュバスとかサキュバスのこと？」

「そう。　でも、それは伝説上の話だ。　本当の夢魔だよ」

僕は何のことだかさっぱりわからなかった。

インキュバスやサキュバスが本当の夢魔じゃないとしたら、一体なんのことなんだ？

「奴等は人の肉体と生命力をつなぐ部分が大好物なのさ。なんていったらいいかな……うーん、そうだ。吸血鬼の夢バージョンみたいなモンだよ」

「それがどうかしたの？」

「そいつらが、もう活動し始めているかもしれないんだ。　このままだと、いずれ皆が夢魔に殺されてしまうかもしれないってことさ」

ケビンは真剣な目で僕に訴えかけてくる。

「ちょっとまって。　ケビン。　さっきからおかしいよ。　夢魔だの吸血鬼だのって。

頭でも打ったんじゃないの？」

「違う！　これは本当のことだ」

するとケビンは急に剥きになって、僕を怒鳴りつけた。

そして僕に迫ってきて、上から下までにらみつけながら、こう言った。

「もうリップがお前に告知っているだろうがな。最近、俺の様子がおかしいって」

「ど、どうして知っているの？」

「どうしても何も、全部お見通しさ」

すると、ケビンは鼻で不気味に笑い、天井を眺めながらニ、三歩あとずさった。

まさか。　紙に書いてひそかにやりとりしていた内容を知っているだなんて……

恐ろしい。　ジェシーのことといい、リップのことといい、ケビンはなんでもかんでもお見通しのようだ。

ここは、嘘をつかずに、本当のことを言ってしまったほうが良い。

「……そっか。　なら、仕方が無いや。　あのね、確かにそうだよ。リップは理科の時間のとき、僕に手紙を回してきた。　最近、ケビンの様子がおかしくない？　って。

僕は、オカルトに詳しくなってるの？って聞き返したけど、リップは……」

「どうせアイツのことだ。　何も信じてないさ」

僕が喋りきる前にケビンが口を割ったので、僕はそのまま黙り込んだ。

ケビンは続けた。

「現に俺の兄貴だって、何も信じちゃいない。　俺の兄は……ほんとうは言っちゃいけないことなんだけど」

ケビンは一旦そこで区切り、僕の目を見つめて「お前を信じている」と言うように視線で訴えかけた後、口を開いた。

「ケレックは最初、俺の家の魔術師として後継することになっていたんだ」

「え、魔術師？」

「詳しい内容は、あとだ。それで、ケレックが魔術師になるはずだったんだけど、アイツは最初から魔術なんてまったく信じていていなかった。

面倒くさがって、権利を放棄したんだ。俺はそのことを最初から予測していた。アイツのことだからな。それで……ケレックに変わって、俺が魔術師になろうと思ってるんだ。

俺がおかしくなったって言うのは、急に魔術師らしくしたからだろう」

ここで、ケビンはフンと高々に鼻息をついて、皮肉たっぷりに言った。

「そのうち、無知な人間な皆滅びるのさ。だらか、俺がさきがけて、皆のことを救おうと思ってる。わかるか？　世の中は、目に見えるものだけじゃ保っていけないんだ」

第十八話ー現実的な思い込みー

ケビンは絶対にどうかしている。
魔術師になろうだなんて……。

確かに、僕も一度は魔術師になれたらな、って思ったことはある。
でも、あきらめた。よく考えてみれば、魔術なんて、ただの紙の上だけでの存在じゃないか。

あいつは謎だ。謎だらけだ。
確か、魔術師の後継者になるとか言ってたな。　だとしたら、一家そろって魔術師なのか？　アダムスファミリーならぬマジシャンファミリーだ。
素敵じゃないか。笑えて。だって、マジシャンなんて手品ならまだしも、本物の魔術を使う奴は絶対にいない。あったとしても、迷信に決まっている。

とりあえず、自分にそう言い聞かせて、今日一日過ごすことにした。
そうさ、魔術師なんて……！
でも……。

「レンディ、最近妙に静かだけど、一体どうしたの？」

ジェシーが心配そうに僕に話し掛けてきた。
やっぱり気になって仕方が無い。
魔術のことならまだしも、「大量殺人が起こる」なんて宣言されて、普通にしていられるほうがおかしい。

しかし、僕はいつものように返事をした。
このことは内密にしておかなければならない。

「ううん、ちょっとね」

「レンディはいつもそうやってごまかしているけど、今回はそうはいかないわよ？」

しかし、ジェシーはもう見破っていた。
僕の態度の変化に。　まるで、母みたいだ。

僕は、しばらくためらってから、ふうと溜息をついて、事情を説明した。

するとジェシーは「またまた～」といって、僕にあきれて果てた様子でこう返事をした。

「目に見えないことを信じてるほうがおかしいわよ」

「でも、彼は言ってたんだ。
この世の中は、目に見えるものだけじゃ保っていけないって！」

「ケビンは、変わってるのね」

「本当、最近どうしたんだろうね」

ケビンについての詳細は、ごまかしておこう。

「あの子のことは、さっぱり。それよりもレンディ、昨日の宿題やってきた？」

「あ、ゴシック建築のところ？」

「違うわよ。教会の……」

その後、僕はいつものように学校で過ごした。

下校の時になって、僕はケビンとすれ違ってしまった。

しかもそのとき、おもわずドキッとくる一言を彼が言ってきた。

「まさか、お前……。俺が昨日言ってたことを誰かに話してないよな？」

「う、うん。　誰にも話してないよ」

僕が嘘をつくときはいつも顔が引きつっていることを彼は知っている。

だから、できるだけ自然に答えるようにした。

しかし、彼はうすうす僕の嘘に勘付いているのか、しばらく僕の目をにらみつけたあと、こう言った。

「誰かに言ったら、お前の立場がなくなると思え」

そう告げると、彼は僕の前から立ち去った。

危ない。　昨日ケビンが話していた”あのこと”をジェシーにばらしかけていたところだ。

でも、変に言いふらしたりでもしたら、きっと彼が言っていたとおりに……そう、僕の立場が無くなる。怖い。

なんてったって、彼はクラスの中でも権力のある連中とも関わっ

ているんだから。

ケビンの一軒が終わってからは、特に変わったことも無かった。
僕と学校の門で出会ったとき以外のケビンは、いつものように、リップや仲間達とつるんでいた。
まさか、あのケビンが魔術師の後継者で、しかも重大なことを隠しているだなんて。

リトルが言っていたことが、本当のような気がしてきた。
夢に現れた、赤い服を着た男の見せた幻想（ビジョン）、ケビンの警告……。
この先に待ち受けている運命が本当に最悪なモノなのだとしたら、当てはまっている。
しかし、あいつは本当のことを言っていたのだろうか？　もしかしたら、僕が勝手にそう思い込んでいるだけなのかもしれない。

だって、赤い服の男といえ、単なる夢の中で起こったことに過ぎないし、ケビンだって、いたずら好きなアイツだから、あとで「嘘でした」ってネタ晴らししてくることもありえる。

そう考えてみれば、僕はただの思い込みをしていたに過ぎないんだ！
そうだ。　絶対、そうに決まっている。　リトルが言っていたことなんて、ただのおどしだ。

「ただいまー！」

「あら、レンディ。おかえり」

そんなわけで、週末は本当に気が楽だった。今まで溜まっていたモヤモヤがすべて飛んでいっちゃったみたいで。

そう、僕にとっての月曜日が、最悪な運命の始まりになっていた
なんて、想像もつかない程にね……。

第十九話ー沈黙の月曜日ー（前書き）

人によっては嫌悪感を抱く内容かもしれません。
ご注意ください。

第十九話ー沈黙の月曜日ー

「おはよう！　レンディ」

「おはよう、ジェシー」

今日も、いつもどおりの一日が始まった。
ケビンは欠席している。
リップが一人だと、いつものように調子が出ないらしく、どこか顔色が悪かった。
何か有ったのかと思い、僕は休み時間に、リップのところへ話しにいった。

「リップがひとりでいるなんて珍しいね」

「あいつが学校を休むこと事態珍しいよ」

リップもケビンの欠席する理由がわからないらしい。

その後は、いつものように巨人のうめき声を聞いて、いつものように授業を受け、いつものように僕は昼寝をしてジェシーにあきれられ、いつものように家に帰った。
そして、いつものように携帯電話を開くと、いつもの男からメールが届いていた。

受信メール００１
１１／７（月）１６：３７
送信者：

little-vegney@abchotmail.com
添付：×
件名：何か
――――――――――
忘れていないか？
――end――
――――――――――
リトルビニーだ。　何か忘れていないかだと？　……そうか、今日は……。
まさか。　リトルが言っていたことは、冗談じゃなかったのか？
フン、そうだ。　そうに決まっている。　それでも僕のことをもて遊んでいるつもりか？
送信メール001
11／7（月）16：39
宛先：
little-vegney@abchotmail.com
添付：×
件名：何？
――――――――――
知らないよ
そんなもの
――end――
――――――――――
その後、僕は彼からの返信を待たず、近くのコンビニへ買い物に出かけた。

そして、一応、携帯電話は持っていく。

お菓子の陳列した棚からチョコレートバーを取ろうとしたとき、リトルからの返事が来た。

受信メール００１

１１／７（月）１６：４１

送信者：

ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ

添付：×

件名：来るのか？

―――――――――

来ないのか？　はっきりしろ。

―――――――――

――ｅｎｄ――

―――――――――

そういえばリトルは、月曜日（今日だ）の午後６時にシルヴァニア公園で落ち合おうと、あの時言っていた。

だとしたら、彼は既にシルヴァニア公園で待っているのかもしれない。

またリトルと会うのか……あの恐ろしいホッケーマスクと。

送信メール００１

１１／７（月）１６：４６

宛先：

ｌｉｔｔｌｅ－ｖｅｇｎｅｙ@ａｂｃｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏｍ

添付：×

件名：×

―――――――――

じゃあ、いく

――end――

あくまで好奇心だ。

これで僕がシルヴァニア公園に行かなかったら、なんてこっけいだろう。

期待させておいて、奴は待ちぼうけだ。

でも、やっぱり行ったほうがいいかな……という良心が、僕の中で、”そうはさせない”と言っている。

そう考えてみれば、あの時、リトルが「今のお前は何も信じてくれなさそうだからな」と言った真相がわかるかもしれないチャンスだ。

いくら、僕だって不思議なことへの関心は、少なからずとも、ある。ケビンほどではないけど。

別にいいじゃない？　聞くだけの事を聞いておいて、あとで逃げたって。本気で彼を信頼しようだなんて、馬鹿げているじゃないか。

その後、僕はコンビニへ行った足でシルヴァニア公園へ向かった。

家の近くにあるコンビニからシルヴァニア公園までは、３０分ほどでたどり着けた。

ジェシーの家からシルヴァニア公園まで行くのに１時間も時間がかかったのは、彼女の家がシルヴァニア公園とは反対方向にあるからだ。

僕が、シルヴァニア公園にたどり着いたのは、五時三十分頃だった。待ち合わせの六時まで、あと三十分ある。

とりあえず、近くにあった、メッキがはがれてさび付いている白いベンチに腰掛けて待つことにした。
しかし、さっき買ったポテトチップスを全部食べ終わって、三十分経ってもリトルの姿が現れない。

時々、すぐそこまで来ているのではないかと、ベンチをたってあたりを見回したりもしたが、彼の姿は何処にも見当たらなかった。
ただ、一台の車が僕の目の前を過ぎ去ってゆく。

ああ！　そういえば、彼はひだまり広場で待ち合わせをしようといっていたじゃないか。
じゃあ、ひだまり広場に行かないと！

僕は急いでじめついた公園の中に進んでいった。
心なしか、以前この公園にきたときより、いくらか不気味さが和らいでいるような気がする。　前に来たときは、夜も遅くてあたりは真っ暗だった。
でも、今はまだ六時を少し過ぎただけだから、そんなに真っ暗というほどでもない。
まだ、空が濃紺色に染まりきらないうちだから、足元にはそれほど注意を払わなくても大丈夫だ。

相変わらず、人は一人もいない。
こんなに人気の無い公園も、そうそう無いだろう。
リトルと会うのは、これが二度目だけど、前にきたときも同じようにまったく人気が無かった。
これは、ワナか？　偶然か……？

広場についたとき、朱色の時計台のもとに人影があることに気づ

いた。
どうやら背格好からしてリトル・ビニー本人のようだ。
すれ違いだったのかな……
彼はふと、僕のほうに顔を向けた。

「すみません、待たせましたか？」

リトルは、フッと鼻で笑ったあと、いいや？　と首を振った。

「それよりもレンディ君、心中を決めてこられたかな？」

「いえ、今は……あの、それよりも、もし僕が”はい”と言ったら貴方は何をしてくれるんですか？　と、言うより、何をするつもりなんですか？」

「……」

リトルは僕のことを、しばらく見据えた。
何を答えようかと、考えているところなのだろう。
しばらく僕と見つめ合うと、不意に彼が口を開いた。

「ふうむ、つかぬ事を聞くが、お前は不思議なものを信じるか？」

「は？」

しかし彼は僕の返答にも動揺せず、答えをまった。僕は、少し考えてから返事をした。

「目に見えないものは信じられません。」

「……そうか。
しかし、安心せよ。　お前には魔術師になる素質が有る」

……え?!　何を言い出すかと思いきや、そんな馬鹿げたことを……。
こいつはケビンと同じか?

「僕のことをからかっているつもりですか?」

「いや?　決してお前をからかってなどいない。
むしろ、希望の選択肢を与えてやったんだぞ」

リトルが何を言っているのかわからない。
とりあえず、信じたら自分はケビンと同類決定だ。

「フン、何が魔術師だ。そんなの現実にありっこない……」

「では、仕方が無いな」

リトルはけだるく溜息をついた後、ポケットから細長い布を出し、うでをコマ送りにしたかのごとくすばやく動かして、僕の目を隠した。

「ちょ……!　何をするんですか」

しかし、彼は無視して、僕の両腕を背後にまわし、ロープのようなもので何十にも縛った。
そして、彼は僕のことを押し倒すと、今度は足をロープで縛りつける。

僕は、必死になって、むがむがと抵抗したが、手も足も封じられているため、のた打ち回るだけで、身動きの取り様が無かった。

「い、いやだ……っ　やめてよ！　嫌だって言ってるだろ?!」

しかし、彼の怪力の前では僕もひれ伏すしかなかった。いくら抵抗しても、無駄だ。

「痛くはしない。　おとなしくしろ」

絶対、無理だって。

何をされるのかもわからないのに……！

僕が完全に身動きを取れなくなったところで、彼は僕の体をひょいと持ち上げ、どこかへ持ち去っていった。　まるで、僕がおもちゃのようだ。

それよりも、一体何処へ行くつもりなんだ?

このまま僕はどうされるのだろう……身代金にされて何日も家族や友達と引き離されるのか?　もしかしたら、臓器売買に巻き込まれることだってあるかもしれない……嫌だ、そんなの！

僕はありったけの声を振り絞って助けを呼ぼうとした。

ところが、肝心の声が出ない。

あまりの恐怖で声が出せなくなってしまったのだ！　むなしくも、涙だけが頬を伝って流れ落ちる。

しばらく、リトルに担いで歩かれた後、ふと立ち止まったと同時に、車のドアを開ける音がした。

きっと、さっき通りかかった車に乗ってきたのだろう。　あの時気づいていればよかった！

その車の中に無造作に押し込まれたあと、足元にあるドアを勢いよく閉められた。

しばらくして、前方でも、ドアを開ける音が聞こえた。　奴もこの車に乗り込むつもりだ。

僕のときと同じように、勢いよくドアを閉める音が聞こえ、まもなく車にエンジンがかかった。

そして僕は、不思議な運命へと導かれてゆくのである。

第十九話ー沈黙の月曜日ー（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございました！
もう少しで第一部が終わります。レンディはどうなってしまうのでしょうか……。この続きも頑張って書きますので、今後ともよろしくお願い致しします。

第二十話「冷たいナイフ」

あれから何時間が経ったのだろう……？

僕は、もともと車に酔いやすいせいもあってか、緊張と恐怖が混ざり合って、かなりの吐き気に見舞われていた。　今にも吐きそうだ。　さっきから、何度も口の中がすっぱくなっている。

僕が車に乗せられている間、何度も運転席のほうへ向かって「どこへいくんですか？」と話し掛けたが、彼が何か返事を返してくることは無かった。

そのうち、僕もあきらめて、話し掛けるのをやめた。

そのあとも、車はしばらく走りつづけた。

もう吐き気も限界まできたところだ。戻さないようにこらえているのが、やっとだという頃に、車はようやく停止した。

彼は一度外に出て、僕がいる後部座席のドアを開けてくれた。

車から降りようとしたとき、彼は僕の足に結ばれている縄を解いた。

彼に引っ張られて外に出るとき、僕は彼が意外とやさしい人なのかな……と思ったりもしたが、　それは彼が本性を見せるまでの淡い幻覚に過ぎなかった。

時々段差につまづきそうになりながらも、彼にリードされて2，3分（と、言っても感覚的にだが）歩いた。　その後、僕たちは室内に入った。（っぽかった）

室内に入るときは、リトルが先にドアを開けてくれて、つまづか

ないようにしてくれた。
その後も何分か歩かされた。途中でどこか見覚えるあるようなにおいの場所を辿ったかと思いきや、そのうち、埃臭さと妙な甘い香りがまざりあう、なんともいえない場所にやってきた。

そこは、今まで辿ってきた場所とはうって変わった静けさだった。車のエンジン音さえ聞こえない。
カツンカツンというリトルの淡々とした足音と、そのあとをおぼつかない足取りで進む僕の足音だけが、室内に響く。

やけに埃臭くて甘い香りのする場所に入ったあと、ある程度中まで進んだところでリトルは立ち止まった。

「さあ、前に出ろ」

僕は、どういうことなのかわからず、ちゅうちょして後ろから押される背中にフッと力を入れた。

「え、どういうこと？」

おびえた声で僕は彼に聞いた。
すると、リトルは”いいから、早くしろ”と僕をせかしてもう一度僕の背中を押した。

「適当なところで立ち止まればよい」

「ころばないよね？」

「大丈夫だ」

そんなことを言われても、僕は心配だった。
目隠しを去れているから、手探りで進むしかない。
もしやと思って、転ばないように足を引きずるようにして歩いた。
3，4歩進んだところで足元の感覚がやわらかくなった。　まるでふかふかのじゅうたんの上を歩いているようだ。
そんな、じゅうたんで出来たのような道を歩み進んでいくと、あるところまできたところで、リトルが「止まれ」と言った。
僕が立ち止まると、つづいて

「椅子に座れ」

という指図が下された。

手をふさがれているから、手探りをすることができない。
僕は椅子の位置を、足で慎重に確かめながら、そっと腰をおろした。
まとわりつくようにフカフカしている。高級そうな椅子だ。
でも、ちゃんと彼が言ったとおり、そこにそれがあったからよかった。

だって、もしも座ろうと思って腰をおろしたときに、椅子がそこに無くて尻餅をついたら格好悪いじゃないか。
いや、こんな目隠しをされて何処につれてこられたのかもわからないのに、格好いいだの悪いだのを気にしてなどいられないか。

僕には、これからされることが一体どんなことなのか、想像もつかなかった。
僕が椅子に座ると、彼は改まった口調で、こう言った。

「魔術師になることに誓を立てよ。　さすれば、お前の身を取り囲

むものから解き放ってやろう」

そんなことを言われて、「はい」と言う意外に、なんと答える？

「は……」

いや、ちょっとまて。仮にここで僕が「はい」といって魔術師になったとしたら、一体どんな人生が待っているのだろう？　いや、人生、だなんて、すぐに決められるものではない。

しかし、”魔術師”――……と聞いて、想像するもの。

すごい技を使えるようになるのかな。もし、そうだとしたら魔法なんて絶対にありえないって言ってた頃の自分が馬鹿みたいだ。

いや、そういう風に考えるのも、今は違う？　あれ、おかしいな。

極限状態が続いたせいで、頭が変になってきているのか？

しばらくの間、沈黙が続いた。　できることなら、今すぐにでもここを抜け出して、家に帰りたい。

しかし、その時、フッと冷たいものが僕の首元に触れるのを感じた。

――冷たくて――――するどい、鋭利なもの――――……そう、ナイフだ。

「答えを下せ」

落ち着きはらった、冷酷な声が聞こえる。　あんな馬鹿力の相手を目の前にして、そんなことができるワケ、ない！

しかも、ナイフをつきつけられて……。”いいえ”と答えれば、きっと彼に殺される。

生きるか、死ぬかだ。

第二十一話 ― 魔術師の棺桶 ―

「魔術師になります！」

生きるか死ぬかの瀬戸際で、僕が下した決断はそれだった。

大丈夫、彼のいう事に従った。　これで死は免れただろう……。

帰れる。　帰ったら、いつものように母さんが”おかえり”といってくれて、温かいごはんにありつけるんだ。　自分の部屋で、漫画が読める。　好きなだけ、ジェシーとおしゃべりだって、できる……

少なくとも、そのナイフが、僕の首元で鋭い刃を立てるまでは、そう思えた。

「では、新世界の住人の証として、古き世界のお前に死を与えよう」

事が起こるまでは、息をつく間もなかった。

冷酷に触れるものは、一瞬にして、僕の首を切り裂いた。

それと同時に、一気に血が噴出し、流れ出る。

ドロりドロり。　ああ……僕の血だ。

……でも、首がとれていないだけまだマシか？　いや、そんなワケない。

だって、生暖かい血が次から次へと溢れ出ていくんだよ？　肩や胸をゆっくりと伝って行くのがわかるじゃないか。

誓を立てれば、生かされるなんて、ただの思い込みに過ぎなかったんだ……

あったかいな、僕の血。　体がフワフワしてくるよ。
ああ……僕は死んじゃうんだ。　好奇心が呼んだ悲劇で。
気のせいかな……さっきからひどく体温が下がっているような気がする。　体から血の気が引いていくみたいだ。　まるで、貧血を起こしたときのように。　いや、貧血だったらまだ可愛い。
だって、このままじゃ確実に失血死するもの。　手を縛られているから血をとめることもできない。　目隠しをはずせない。
だだひたすら、絶望感にかられるばかりだった。

間も無く、意識が遠くなってきた。
まっしろの世界が、目の前に広がる……

その瞬間、僕の意識は無くなった。

それからのことは、覚えていない。
ずーっと長い間、無意識の世界をさまよっていたみたいで。
ここは地獄かな。　それとも天国？

目を開けたつもりなのに、何も見えないや。
それに、埃臭い。

ん……？　埃臭い？
埃臭いってことは、鼻が利いているということか？
いや、僕は死んだはずだ。肉体はもう無くなった。　五感だって、当然……あれ？　使える。

真っ暗だけど、まぶたを開けている感覚はある。
鼻から息を吸っているから、埃臭さだってわかる。

それに、かすかだけど聞こえる。
僕の心臓の音……
僕は生きていた！
嬉しくてたまらず、つい飛び起きようとしてしまった。　しかし、ガンとおでこを何かにぶつけてしまったので、そうは行かなかった。
でも、痛みがわかる。　夢じゃない！
おでこを打ったことが嬉しい事だなんて、流石に言えないけど、今の僕にはそれが奇跡にも換えられないほどの嬉しさだった。
そのありがたみを充分にかみ締めた後、ふと疑問を感じた。
何故おでこをぶつけたのか？
僕は、手探りであたりを確認した。（そのとき、手をふさいでいた縄が解かれていることには気づかなかった）
どうやら、あたりは、固い壁で覆われているみたいだ。　とてもせまっ苦しい。　まるで棺桶の中にいるかのよう。
いや、実質上、僕は棺桶の中にいるんじゃないか？
さっき、起き上がろうとして、おでこをぶつけたのはそのせいだったに違いない！
それに、さっきは焦ってて気づかなかったけど、手を縛っている縄や目隠しははずされている。　これなら抜け出せるじゃないか！
でも、ちょっとまて。
棺桶の中に入れられたって事は、僕は死んだってこと？　……でも、僕は死んでなんかいないぞ？！
棺桶のふたなら、押し開ければきっと外に出られるけど、外に誰かがいたらどうしよう。

まさか、お葬式の最中に棺桶のふたがひとりでに開いて僕が出てきたなんていう展開になるなんてことはなかろう。

棺桶から、まるでおはようと言わんばかりの様子で起き上がり、僕はきょとんとした顔で「みんなどうして泣いてるの？　誰も死んでなんかいないじゃないか」っていう。

そう、奇跡的に僕は死んでなんていませんでした！　めでたしめでたし……プっ。

いや、もしかしたら、もう埋葬済みだったりして！

そんなきつい冗談考えながら、そっと前の壁（皆さんから見たら、上にあたるのだろうけど）に手を押し当てた。　ギィと鈍い音を立てながら、ゆっくりと壁が持ち上がってゆく……。

よかった！　まだ埋葬されていない！

こうなると僕がまるで吸血鬼にでもなったみたいだな。　いや、本当に死んでいたのだとしたら、本物の吸血鬼なんだろうけど。

ところで、僕は魔術師になれたのだろうか……？

魔術師と吸血鬼は遠い昔、親戚だったんじゃないかという変な妄想が頭によぎる。

だとしたら、僕はバンパイア・マジシャン？　か、格好良い……

ふたを開けると、外の空気が棺桶の中に一気に流れ込み、のどの奥が冷やされた。　それと同時に寒気が走った。

でも、なんて新鮮な空気なんだろう。　外の世界がこんなにも明るいなんて。

と、言うか明るすぎて、暗闇になれていたためにはちょっとまぶしかった。

僕がしばらく目をシバつかせていると、一人分の拍手する音が聞

こえてきた。　一体誰だ？

棺桶のふたを開けてから１０秒くらいたち、外の明るさになれてきたころ、その人物が誰なのかわかった。

「よくやったな。　おめでとう、レンディ君」

第二十二話 ― 意外な事実 ―

そいつは、僕を殺したリトル・ビニーだった。

目が慣れると、外は思ったよりも薄暗かったことに気づいた。天井が高く、石灰のような壁が張り巡らされている。僕の身長よりも１ｍほど高いところでランプに灯された火が輝いていた。そして、となりには、もうひとつの棺桶……。これは、何に使うんだろう？

それにしても、何がなんだかさっぱりわからない。それよりも一体、ここはどこ？

「喜べ。お前は魔術師として再生したのだぞ。新しい世界の住人として、目覚めたではないか」

「え、ちょっとまってよ。僕は殺された……。そうでしょう？」

すると、リトルは眉間に指先を当て、深い溜息をついた。

「殺されていたら、今更、私なんかと会ってないだろうが」

冗談じみた様子でリトルがそういった後、真剣な面持ちになった。

「……あのだな、これは一般人が魔術師になるために行う儀式、”参入儀礼（イニシエーション）”だ。」

「イニシエーション？」

リトルはふうむと、静かにうなづいた。

「この儀式には、本物の感情が必要でな。　新しい世界に入るものは、皆、それに対する恐れと不安を乗り越え、古い世界での死を体験し、新しい世界で目覚め、祝福を受ける。
成人や看護士とて同じ事。　様は形だけでは魔術師になれないってことだ。　本当の魔術師には心の準備も必要なのだよ」

「へえ、それで僕を拘束・連行・殺害ってワケか」

僕は彼のことを罵ったつもりだったが、彼はあくまで真っ当な答えを返してきた。

「そうだ。　怖い思いをさせたことには頭を下げる。　しかし、最後の祝福が抜けているな」

「冗談もいい加減にしてよ！　僕はいつだって、あんたを警察に突き出せるんだからね？！」

ここまで極限状態に陥れられてそんなタネ明かしをされたら、誰だって頭にくる。　魔術師になった証拠なんてどこにも無いし、むしろ魔術師がどんなものなのかさえ、わからない。
僕は彼をにらみつけた。
しかし、またもやリトルは深く溜息をつくばかりだった。

「まったく。　それにしても、お前は本当に何もわかっていないようだな。　それでもオカルト好きか？　と言いたいところだが……まあ、初心者なら仕方がない。　大目に見るとしよう」

「そんなことよりも、アンタは一体誰なんだよ？　この、となりに

ある棺桶は？　まさか、ここはお墓じゃあるまい」

どうして僕がオカルト好きだってことを知られているんだ？

僕は我慢しきれず、疑問に思っていたことを彼に吹っかけた。

「そうだな。　まるでお墓のようだが、お墓ではない。　たぶん、そこにある棺桶は、二人同時でも、イニシエーションができるように、誰かが用意して、そのまま放ったらかしたものだろう。」

なるほど、そういうことだったのか。

「そして、私についてだが……それが一番気になっているようだな。フフ、では、そろそろ私の正体を明かすとしよう」

僕は心のそこから込みあがってくるもどかしさを抑えながら、彼の言葉を待った。　僕が単に期待しすぎているのか、彼の子供を喜ばせる才能が皆無なのかわからないが、彼はあくまで冷静な様子だった。

興味津々に彼の顔を見ていると、時々目が合う。

しかし、彼は僕とは目をあわせようとせず、何か別のことに思いふけっているようだった。

そして、しばらくリトルが考えにふけった後、僕の顔を見ながら深刻そうな面持ちで口を開いた。

「レンディ、落ち着いてよく聞いてくれ。　私は、３０年後の未来から来た、最後の魔術師だ」

「え？」

僕は彼の言ったことが信じられなかった。

彼の言葉を信じようったってどこをどう信じれば良い？

「……待ってよ。　そんなのＳＦでしかありえないって！　そもそも魔術師って一体何のことだよ」

「お前が信じられないのも無理は無いが……まったく、これだからこの時代のガキは」

そう言って、彼は、仮面の上からあごをさすった。

「光学技術や物理学が進歩すれば、タイムマシンなんてなんのその。いや、今現在の段階でだって、作れるかもしれない。　なぜなら、お前等が生まれる前からそれはあったのだからな。　なんなら、お前の成績を全て言い当ててやることだってできるんだぞ？」

マスクの下から覗く目がやたらと輝いて見える。　なんのことを言っているのか、さっぱりだ。　そのとき、目の錯覚なのか、彼の左目が青い色をしているように見えた。　右は、茶色である。

「わかったよ、うん、わかった。　でも、僕の成績をいう事だけはやめてよ」

彼が理解不能なことを言っているが、ここでも全部の成績を言い当てられたりでもすれば、これを読んでいる皆さんに僕の頭の悪さ加減がわかってしまうので伏せておこう。

これはあくまで個人情報だ。

そんなことされて、恥ずかしいにも程があるじゃないか。

「ところでレンディ。　タオルは必要かね？」

不意に彼が言った一言が、僕には理解できなかった。
しかし、今まで起こったことを思い出してみれば、その理由がわかった。

「うん、いる」

僕は、あの時、首を切られてなんていなかったんだ。
その代わりに、ナイフを引き抜かれたとき、体温と同じくらいの温度の水をかけられた。
僕はそれを、首を切られて血が流れ出たのだと思い込み、脳が勘違いして貧血を起こして気を失った。

その証拠に、ひんやりとまとわりつく濡れたシャツが気持ち悪い。
棺桶を開けた瞬間に寒気がしたのは、そのせいだ。　でも、よかった。　本当に生きている！

「それと……ひとつ言っておくが、私のことは一切秘密にしておいてくれ」

「何でまた？」

リトルは少し、落ち着かない様子である。

「外部に私の正体がバレたら、大変なことになる。　レンディ。信じがたい話しだが、私を守れるのはお前しかいない」

よく意味がわからなかった。
僕が、もしもバラしたら？　ということを聞くと、彼は「まだ私の素性を話していないから、現段階ではなんともいえないが、万が

一のときに、私と二度とあえなくなるからやめておけ」と言っていた。　別に、彼とはあえなくなったって、僕はどうってことない。けど、彼は本気のようだったから、僕は仕方なく、それに従うことにした。

僕達は暗い石灰の壁で覆われた神殿のような場所を出ると、しばらく暗くて狭い道を歩いた。　途中でパイプのようなものに僕は足を引っかけてころんだ。

「おっと、気をつけろよ？」

「わかってる。　暗くて足元がよくわからなかったんだ」

そう。時々、段差があったり、草が生えていたりして、誰もとおらないような場所だということを仄めかしている通り道だった。そんな場所をしばらく歩いた後、人がひとり、やっと通れるくらいの小さな鉄製の扉に出くわした。

「ちょっとまて、今あけてやろう」

そういうと、リトルはしばらくその扉を手探りした後、魔法の使って扉を開けるのかと思いきや、なんと力ずくでその扉に体当たりをした。

僕はその光景を唖然と見ている中、リトルは時々「これだから古いものは困る」などとぼやきながら扉に手を当て、開くかどうかを確かめていた。

「ねえ、リトル……魔法は使わないの？　魔術師なんでしょ？」

「馬鹿だな。　魔術師が魔法を使って扉を開けるわけないだろ。そんな無駄なことはしないぞ」

僕の知っている魔術師はなんだってできるヒーローだ。

例えば、魔法使いのキリマン・ジェーロは、僕の同い年くらいの少年だが、超人的な力を持っていて、空を飛ぶことができるし、手を触れずにモノを移動させられる。　格好いいサンダークラッシュを繰り出すときなんて最高っ！

でも、このリトルはそんな魔法使いとはかけ離れている。　魔術師と魔法使いは違うのだろうか？

いや、彼を魔術師なんて表現するより、ただの詐欺師と表現したほうが妥当なんじゃ……

「ようし、あくぞ。　レンディ、ついて来い」

リトルは力みながら鉄の扉を押して、あけた。

外は明るいものなのかと思ったら、そうではなかった。　今まで通ってきた暗闇と対して変わらない明るさだ。　扉の中に入ると、細長い棒に当たったり、ゴムの匂いがした。

扉を開けて、５０センチほど進んだところにまた扉ある。

その扉は、リトルが簡単に手で開けていた。

そして、僕はリトルに連れられて外に出たとき、初めてわかった。

ここが、僕の通っている学校だったということに……

第二十三話 ― 約束 ―

リトルにつれてこられたところは、僕の通っている、学校だった。
それに見覚えがある。　この景色。　……理科室の隣にある理科準備室だ！
ふだんは入っちゃいけないことになっているから、しょっちゅう見れるわけじゃない。
でも、覚えている。　1ヶ月くらい前、先生に準備室においてある鍵を取ってこいと、頼まれたときに入った以来だ。

僕たちが出てきた扉を振り返って見てみると、それは用務員しか使わない掃除用具入れだった。
僕たちは掃除用具入れの中にある隠し扉からあの神殿に入っていたのだ。

それにしても、学校にくるまでの間、どうしてあんなに時間がかかったのかと思いきや、僕を遠くの見知らぬ場所につれてこられたんだと思い込ませるために、わざと遠回りをしてきたからららしい。
なんて手の込んだやり方だ。
僕が彼に「ドッキリでしたってこと？」と聞いたら、彼は「そんなワケないだろ」といって激怒した。
どうやら、僕がそう思うと本物の感情がすべて台無しになるからなんだとか。

掃除用具入れのすぐ右脇には大きなガラス窓が張られていた。
窓越しには、すぐそばにまで迫っている掘り下げられた草だらけの地面の壁が見える。
学校の一部分は、掘り下げられた場所に乗り出している。　その

隙間を埋めるようにして理科室が建設されていた。　だから、窓から外に簡単に抜け出せるのだ。
　掘り下げられた底の地面に降りている階段が、窓の外をでたところにある。

　そこを伝って、僕たちは外に出てきた。
　こうしてみると、学校にも不思議な場所が隠されているんだと実感して、なんだか胸がワクワクしてきた。　もしかしたら……とか、実は……なんていう、子供が喜びそうな空想の世界が頭の中を駆け巡る。
　例えば、学校には、何か重大な秘密が隠されている、とかね！

　そんなことを想像しながら、ニタニタと笑って、リトルの後についた。（傍から見れば変な奴にだったに違いない）

　リトルの車は学校の門の前に駐車してあった。　濃い銀色の乗用車だった。

「帰るんだよね」

「もちろん」

　僕は、ふかふかのシートや最新式のカーナビに関心しながらリトルの車に乗り込んだ。
　リトルも車に乗り込むと、エンジンをかけて車を発進させた。
　最初、この車に乗ったとき、急発進させられたものだから、それを思い出してみれば彼が僕を気遣ってくれているようにも思える。

　僕がリトルの車に乗せられている間、彼は誰も信じないような身の上話を聞かせてくれた。

「それは大変だね」

「大変も何も、この時代にはＤＮＡ分析ゴーグルがまだないのか、と問いただしてやりたくなるくらいだ」

リトルの話によると、一番最初にこの時代にきたとき、当時ロンドン郊外を騒がせていた銀行強盗と間違えられたらしい。

だから、僕に会うまでの間、ずっと逃亡生活を余儀なくされていたというのだ。

僕とはじめてあったときに、「今は忙しい」といったのも、そのせいだったという。

「昼も夜も無かったな。　この時代に降りついたのは、丁度午前２時ごろだった。　急に変な男に追いかけられてな。　そいつが、どこまで逃げても追ってくるんだ。　おそらく警察か何かだったんだろう……。　とうとう、駐車場にまでおいつめられた。　逃げ場はない。　だから、隠れて奴の背後を狙った」

「それで、どうなったの？」

「始末しておいたさ。　ま、気絶させたておいただけだがな」

彼は軽快な口調でそう言ってのけた。　しかも、最後のところは笑いながら。　なんて恐ろしい男なんだ……。

でも、ちょっぴり格好良い気もした。　僕にも、彼と同じくらい力があったらいいのにな……そうしたら、いくらケビン達にからかわれようと顔面に一発殴りこんでやれば、それであいつ等は僕にちょっかいを出さなくなる。

それに、クラスの中でも権力のある集団に目をつけられたって、

力ではこっちが勝っているのだから、変に手を出したりしてこなくなるはずだ。　向こうが、僕に降参したら、僕はクラスの中で大いばりできる。
　なんて愉快なんだろう！

「さあ、ついたぞ。　さっさと降りろ」

　僕の勝手な妄想を打ちのめして、彼は僕の家の近くで車をとめてくれた。

「冬休みはできるだけあけておけ」

「わかったよ。　送ってくれてありかどう。」

　そして”また今度ね”と言おうか、迷った。　また会うだなんて……

　でも、冬休みはあけておけといっているのだから、きっと冬休みに、また会うつもりなのだろう。

「……また、今度」

　とうとう言ってしまった。　お世辞のつもりだ。
　最後に彼は、僕に向かって静かに別れを告げた。

「ああ、近いうちにな」

　彼は、車を発車させて僕を追い越した後、窓から手を出して、僕に向かって振ってくれた。
　僕は彼の濃い銀色をした車が、夜の町に消えてゆくのを、家の玄関先で、いつまでも見送っていた……

第二十三話－約束－（後書き）

ここで、レンディ・クローズは一旦終了です。
現実世界を舞台にしたファンタジーというコンセプトのもとに書いてみました。
このお話の舞台になっているのは、一応、イギリスのイングランドですが、作者自身あまり詳しくないもので、資料等を探しながら物語を書くという感じで進んでしまいました＾＾；
ファンタジーなのに現実的な内容が多くてがっかりした人もいるんじゃないかと心配になっておりますが、第二部からはファンタジーらしい要素を取り入れていきたいと思います。それが魔術だったり、夢魔だったり。

しかし、ここまで続けられたのも、協力してくださった皆様がいるからです。感謝！　そして、アドバイスしてくださった方々へ、ありがとう！
私にとって、お話を考える上で完全なオリジナルの話を作るというのは、少々なんがありまして、この作品を書く上でいくつか参考にさせていただいた作品があります。（もしかしたらバレていたかもしれません。笑）
しかし、できるだけ自分らしい表現を求めて頑張って書いていきますので、どうかよろしくお願いいたします！
第二部は、只今考案中です。
今まで以上に面白く展開できるよう、がんばりたいと思います＞＜
でわでわ、次の機会まで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6479b/

LENDY CROWZ　第一部

2010年12月4日04時44分発行